

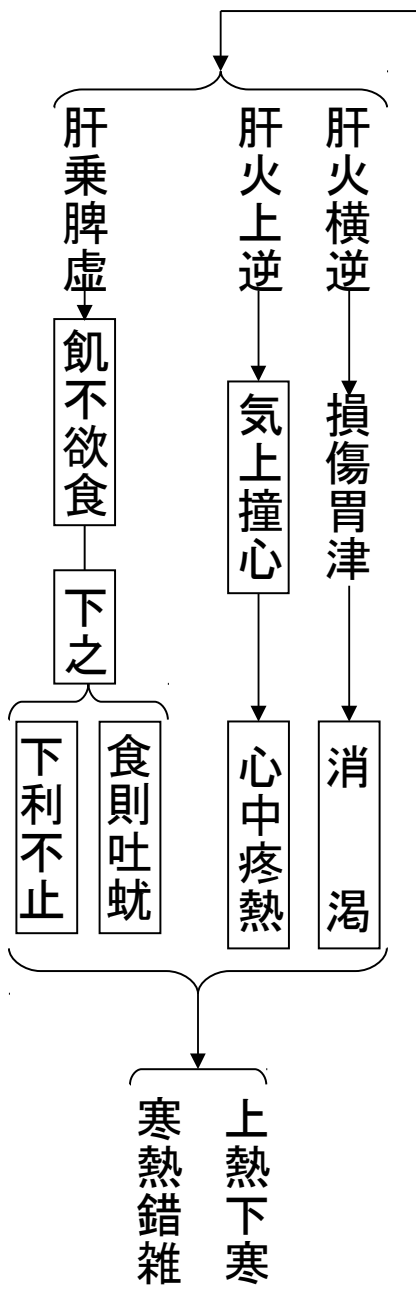
并厥陰病脉証并治

(厥陰病提綱証)

第三二六条 厥陰之爲病、消渴、氣上撞心、心中疼熱、飢而不欲食、食則吐蚘、下之利不止。

厥陰爲病

陽虛極限 — 陰極陽生 — 相火萌生 — 肝生壯火

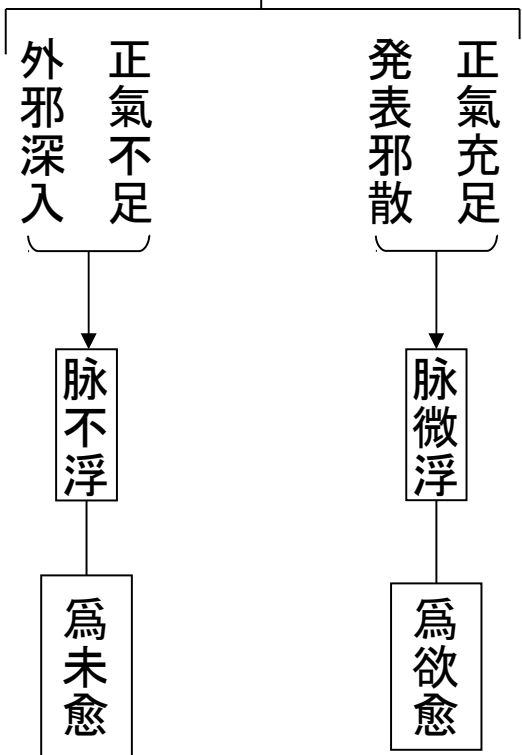


(厥陰中風証)

第三二七条 厥陰中風、脉微浮爲欲愈。不浮爲未愈。

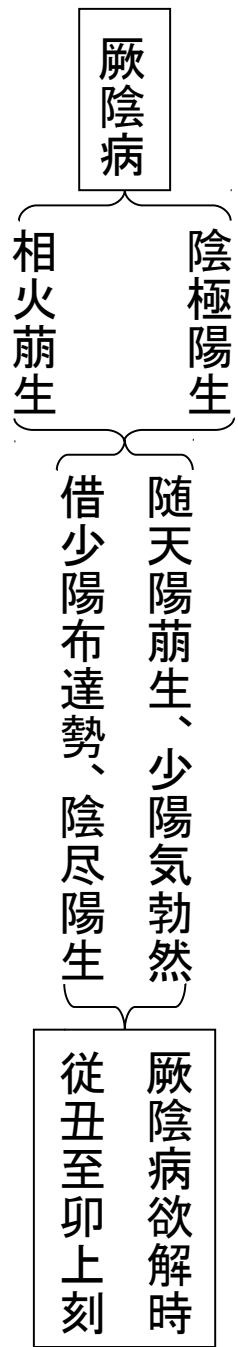
厥陰中風

風邪直中



(厥陰病ノ治癒時刻)

第三二八条 厥陰病欲解時、從丑至卯上。



(補註) 傷寒の三陰三陽病の解す時間帯

厥陰は少陽と表裏をなしている。丑より卯の刻に至る時刻は現代の午前一時から七時に至る時間帯で、少陽の陽気が生じ伸長布達する時である。厥陰は少陽と表裏をなしているので、厥陰病も昇浮する少陽の陽気の助けを借りると、陰尽きて陽が生じる転機に乗じて、病を治癒に転じることができるのである。

『傷寒論』の六経病が治癒せんとする時刻は、すべて自然界とヒトの体内の陰陽の盛衰消長に深く関係している。三陽病では病の治癒機転は自然界の陰陽の盛衰を借りて祛邪を主とし、三陰病では陰陽の消長に乗じて扶正を主としている。

第九条、太陽病が解せんとする時刻は「巳より未」現代の午前9時から午後3時迄の6時間で、一日の中で自然界の陽気は最も旺盛、ヒトもその陽気が外で最も盛んな時間帯で表邪を能く発散させる。

第一九三条、陽明病が解せんとする時刻は「申より戌」に至る、現代の午後3時から9時迄の6時間、自然界の陽氣が減衰して行く時間帯である。陽明病は陽熱過剰の実熱証なので、自然界の陽氣の減退に沿って体内の実熱を外に泄する。

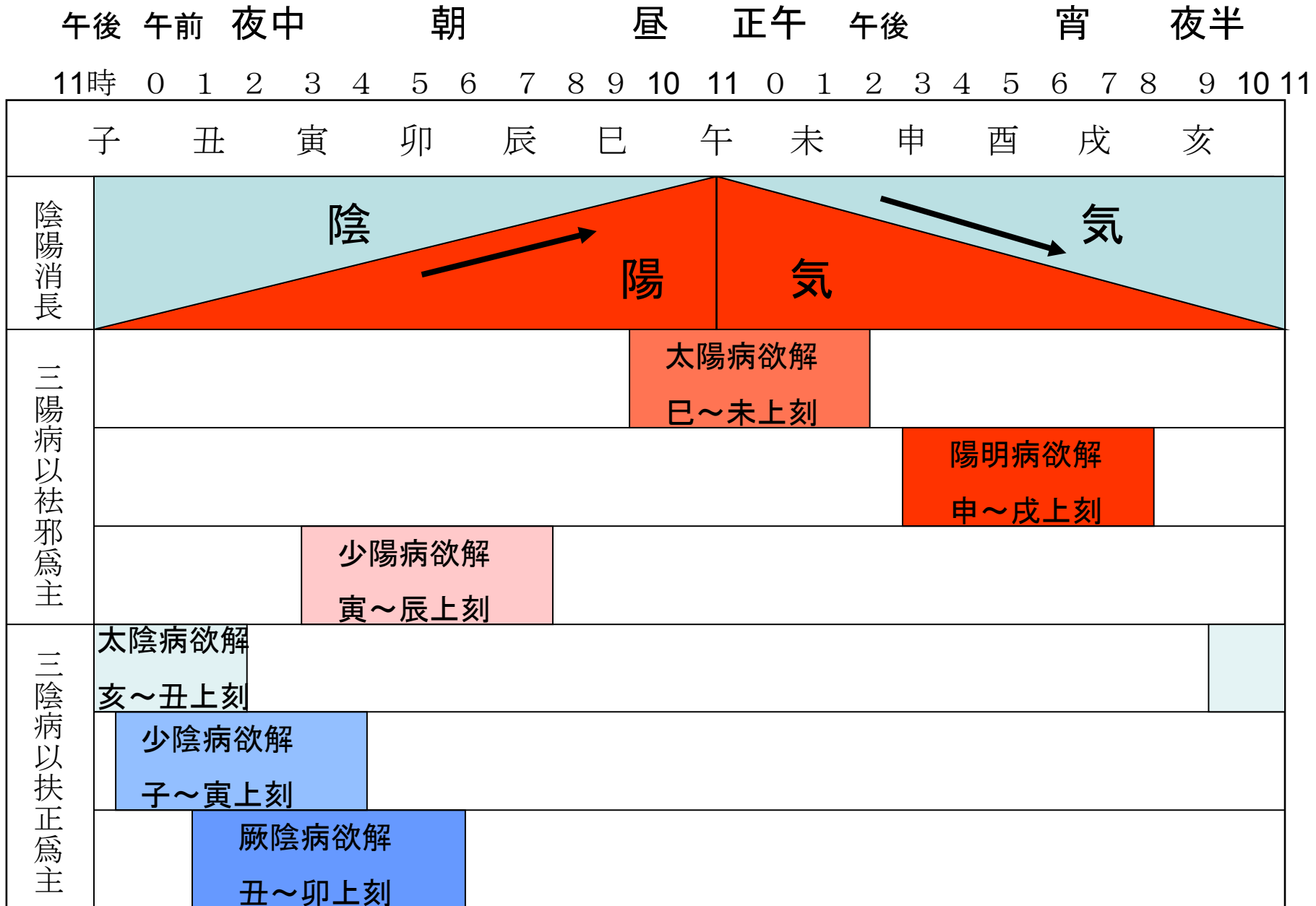
第二七二条、少陽病が解せんとする時刻は「寅より辰」に至る現代の午前2時から9時に至る6時間帯、その中心にある卯の刻は午前5時から7時、日の出の時刻で一日の陽氣昇発が始まる。自然界の陽氣の昇発に乗じて少陽病の胆火内鬱と枢機不運が自然に舒発される。

第二七五条、太陰病が解せんとする時刻は亥より丑に至る現代の午後9時より翌日午前3時に至る6時間、その中心の子の刻は午後一時から午前一時、自然界では一日の陰が極まり陽が始めて還る時間帯である。太陰病は中寒証なので人体でも陽氣が内で生じる機序を借りて中寒を解除する力が扶助される。

第二九一条、少陰病が解せんとする時刻は「子より寅」に至る現代の一一時より翌午前5時に至る6時間、自然界では生還した陽氣がさらに伸長する時間帯である。少陰病は心腎陽衰・全身の虚寒証なので、体内でも伸長四布する陽氣の助けを借りて少陰の陰寒が解消される。

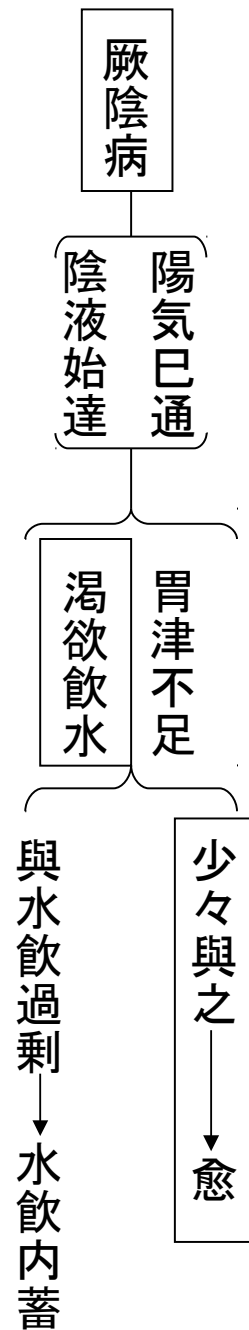
（原田康治先生「時間医学初探」より）

『傷寒論』三陰三陽病之欲解時刻



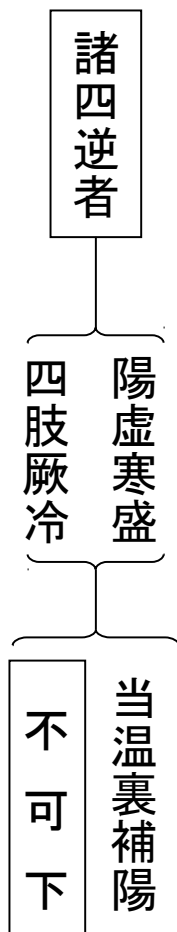
陽復過程、反欲飲水

第三二九条 厥陰病、渴欲飲水者、少々與之愈。



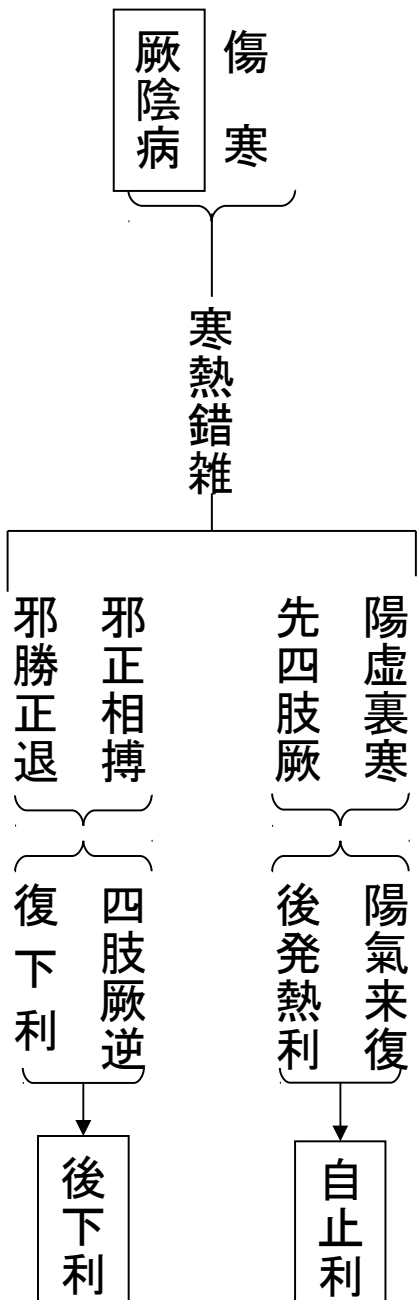
諸四逆不可下

第三三〇条 諸四逆厥者、不可下之、虛家亦然。



寒熱錯雜下利

第三三一条 傷寒先厥後發熱而利者、必自止、見厥復利。



熱与厥之長短と邪正

第三三二条 傷寒、始發熱六日、厥反九日而利。凡厥利者、当

不能食。今反能食者、恐爲除中。食以索餅、不發熱者、知胃氣尚在、必愈。恐暴熱來出而復去也。

後日脉之、其熱続在者、期之旦日夜半愈。所以然者、本發熱六日、厥反九日、復發熱三日、并前六日、亦爲與厥相応、故期之旦日夜半愈。

後三日脉之、而脉数、其熱不罷者、此爲熱氣有餘、必發癰膿也。

傷寒
厥陰病

始發熱六日、厥反九日利

当不能食
反能食者

恐爲
除中

胃氣尚在

不發熱

必愈

食以索餅

恐暴熱來出復去

後(三)日脉之

厥九日發熱九日者

熱厥相応

旦日夜半愈

其熱続有者

後三日脉之

脉数
熱不罷

陽復太過
熱越肉腐

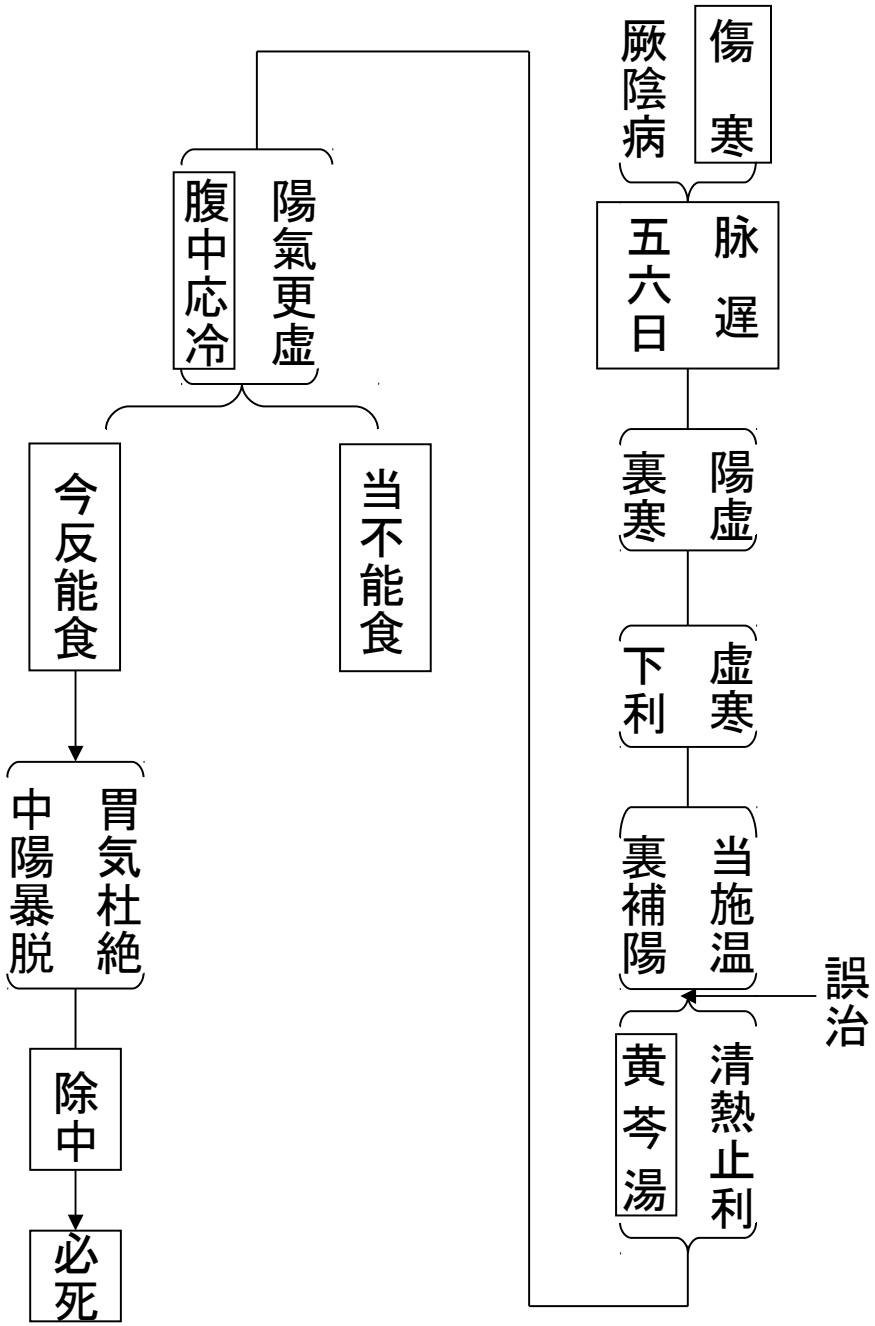
必發
癰膿

寒利を誤治

第三三三条 傷寒脉遲六七日、而反與黃連湯徹其熱。脉遲爲

寒、今與黃芩湯復除其熱、腹中忪冷、当不能食。今

反能食、此名除中、必死。



先厥後熱、復陽太過

第三三四条 傷寒、先厥後發熱、下利必自止。而反汗出、咽中痛者、其喉爲痺。發熱無汗、而利必自止。若不止、必便膿血。便膿血者、其喉不痺。

傷寒
厥陰病

先厥
裏寒無汗
四肢厥冷
虛寒下利

後發熱

陽復陰退

自利必止

復陽
太過

邪熱入血分

下注

喉不痺
便膿血
利不止

寒熱均衡

利止
無汗
發熱

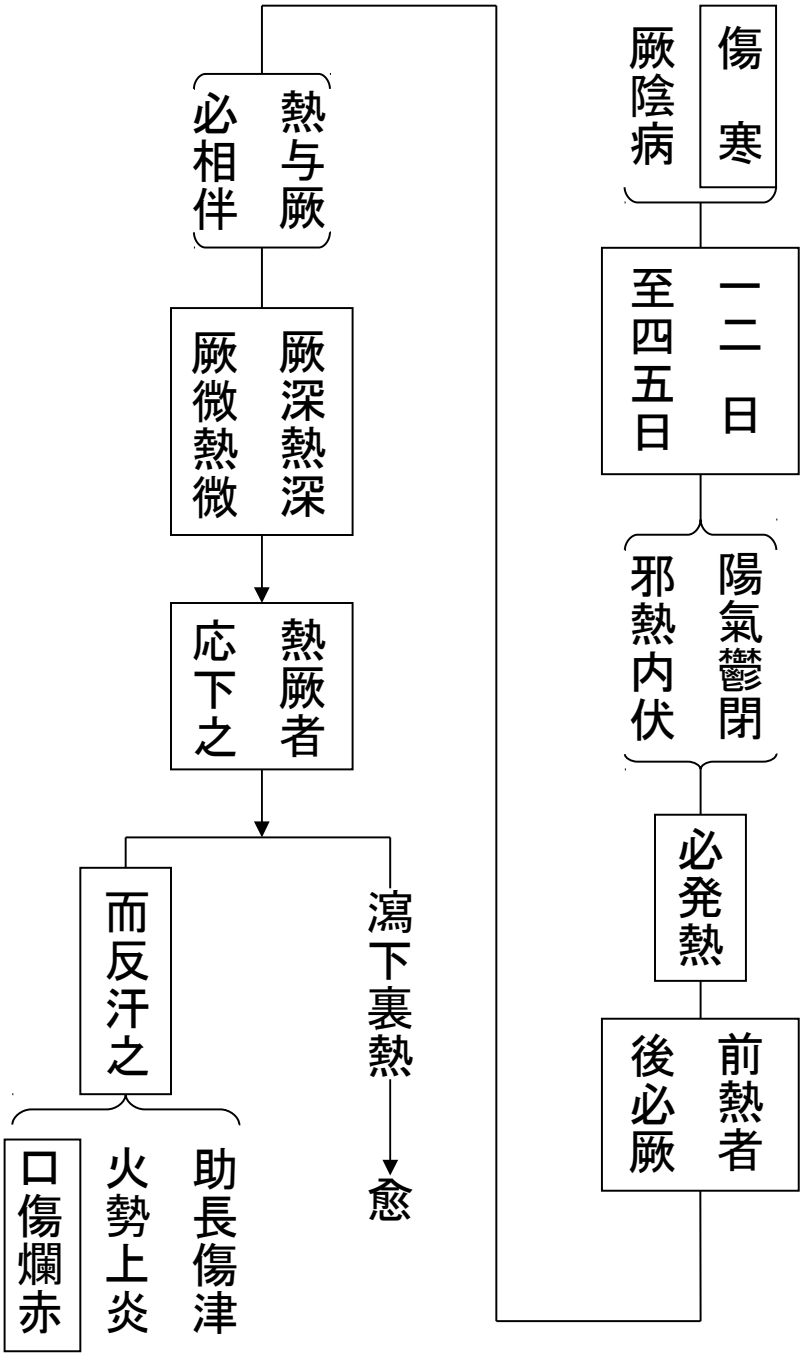
邪熱入氣分
上行

咽痛
汗出
發熱

喉痺

(熱厥の治療原則)

第三三五条 傷寒一二日至四五日厥者、必発熱。前熱者、後必
 厥。厥深者熱亦深、厥微者熱亦微。厥応下之、而反発
 汗者、必口傷爛赤。



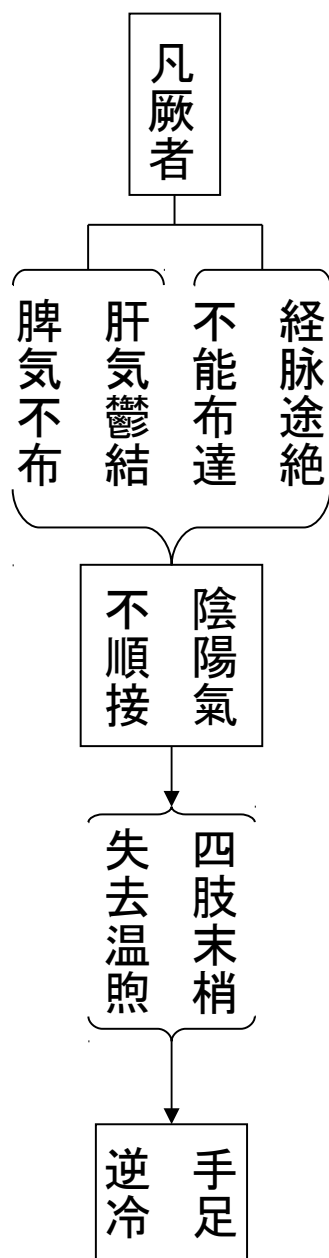
(厥熱相応スレバ治癒)

第三三六条 傷寒病、厥五日、熱亦五日、設六日当復厥。不厥者自愈。厥終不過五日、以熱五日、故知自愈。



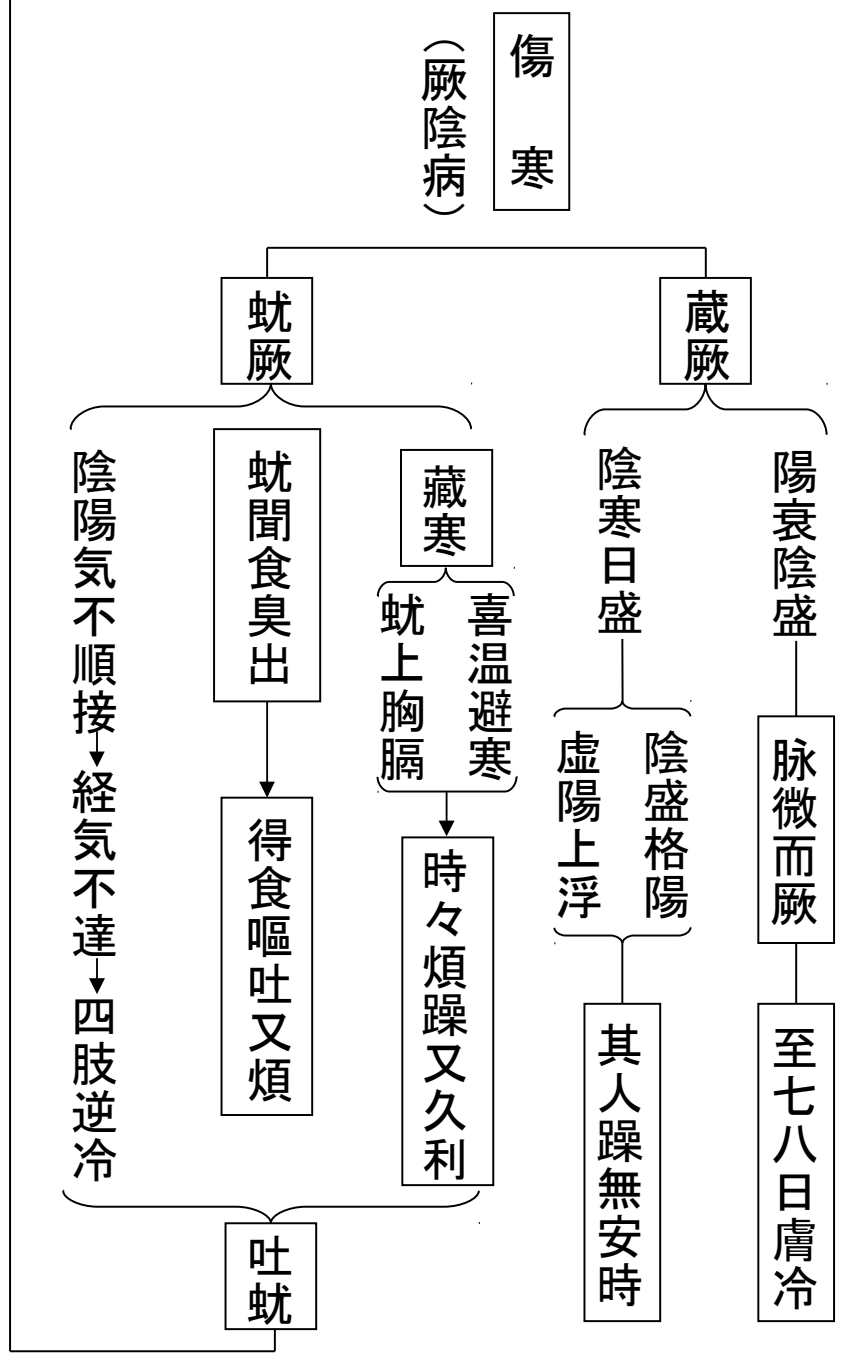
(陰陽ノ氣相順接セズバ厥ス)

第三三七条 凡厥者、陰陽氣不相順接、便爲厥。厥者手足逆冷者是也。



（虯厥 烏梅丸証）

第三三八条 傷寒脉微而厥、至七八日膚冷、其人躁、無暫安時者、此爲藏厥、非虯厥也。虯厥者、其人当吐虯、令病者靜、而復時煩者、此爲藏寒。虯上入其膈、故煩、須臾復止。得食而嘔、又煩者、虯聞食臭出、其人常自吐虯。虯厥者、烏梅丸主之。又主久利。



烏梅丸

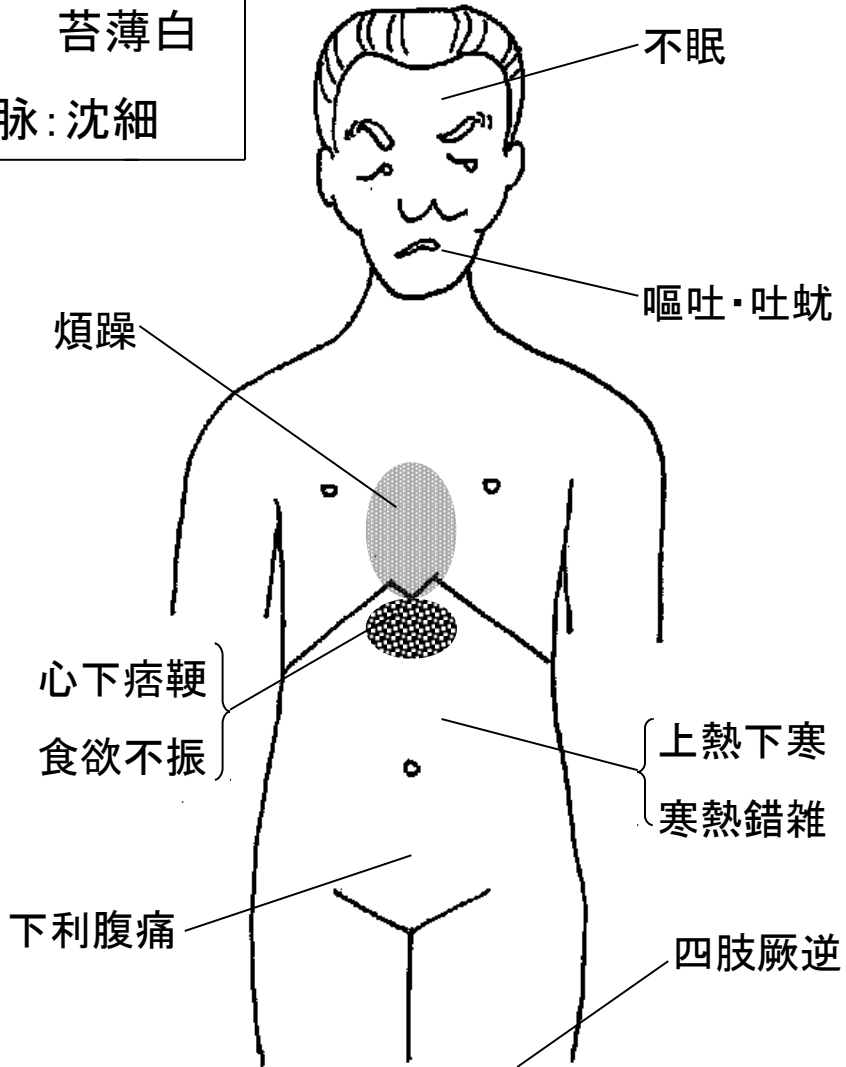
烏梅・苦酒 酸、制虯・收斂固表・止利
 細辛・乾姜 温肝。蜀椒・附子 温腎
 桂枝・当歸 養肝血。黃連・黃柏 清熱
 人參 補氣・健脾

厥陰病の吐蚘・久利は

烏梅丸の証

*

舌：舌質淡
苔薄白
脉：沈細



方意

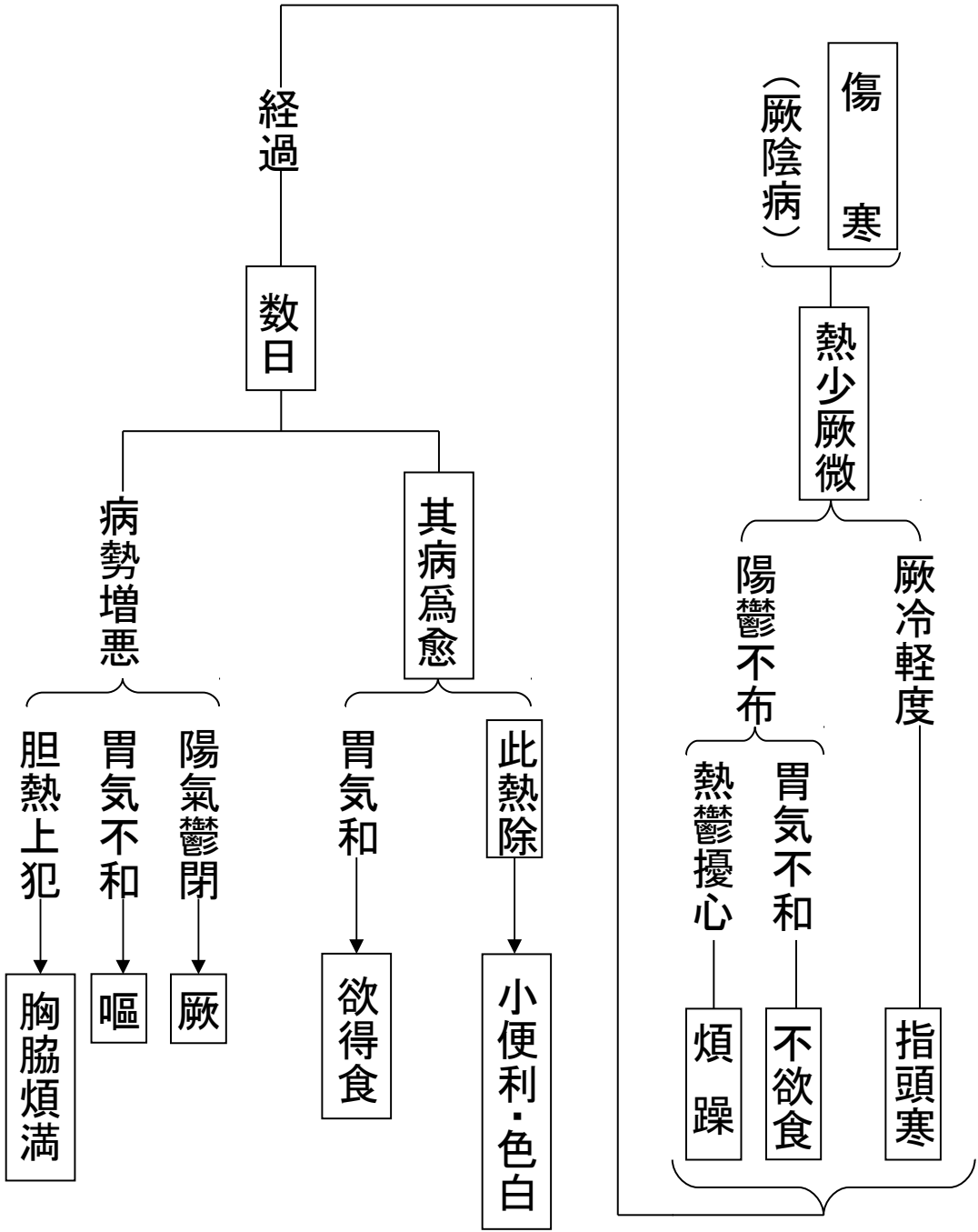
厥陰病の蚘厥および上熱下寒に因る慢性の下利を主治する。

上熱下寒は、厥陰病で肝の相火が復活したが、肝陽が肝に鬱閉されていると、肝熱は上逆して上焦に煩熱を生じ、一方、肝気は脾に乗じて脾虚裏寒を生じて上熱下寒を呈する。その結果慢性の下利を生じる。

蚘厥は、蚘虫が寄生している者では上熱下寒の結果、虫が喜温避寒、或は食臭を聞いて膈に登り蚘を吐くのと、厥陰病で陰陽の気が相順接せず生じる四肢厥逆が同時に見られるものである。

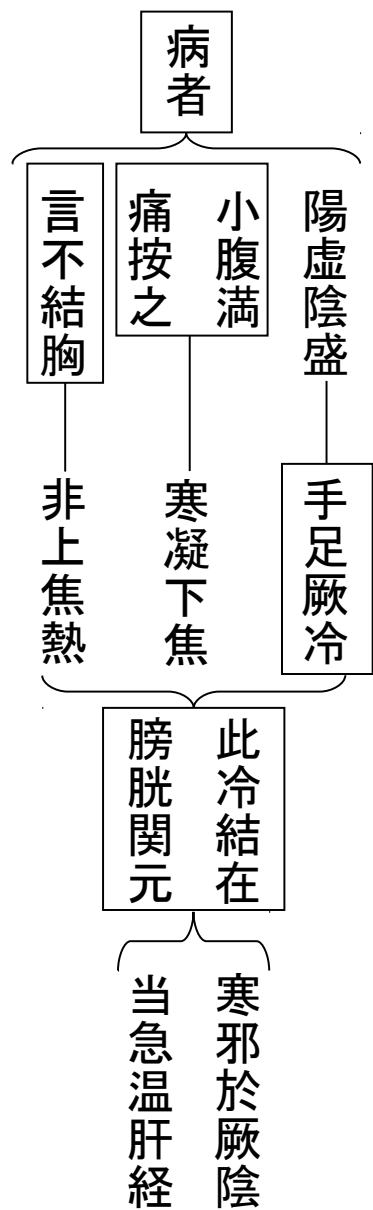
(熱厥ノ予後)

第三三九条 傷寒熱少微厥、指頭寒、默々不欲食、煩躁、数日、
小便利、色白者、此熱除也、欲得食、其病爲愈。若厥
而嘔、胸脇煩滿者、其後必便血。



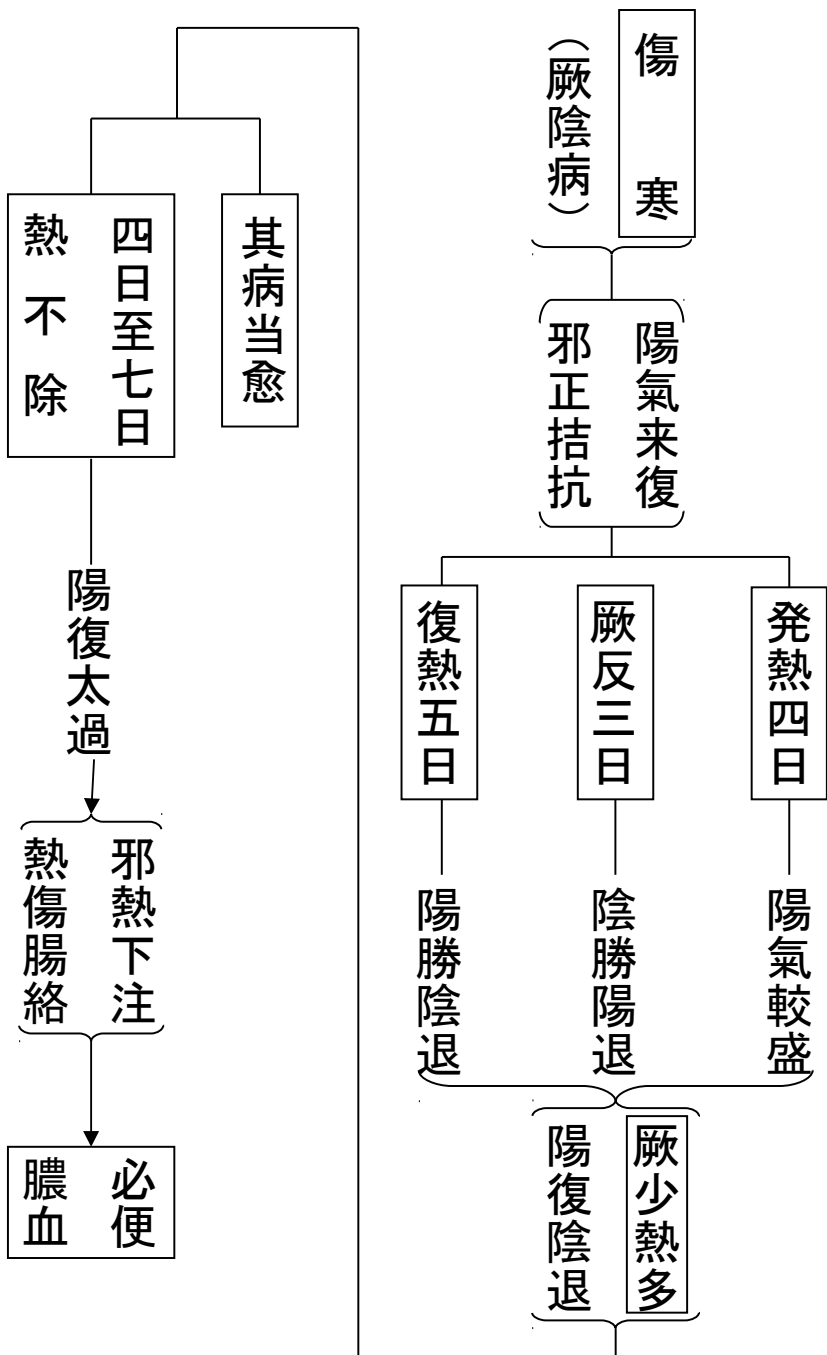
(下焦ノ厥陰寒邪)

第三四〇条 病者手足厥冷、言我不結胸。小腹滿、按之痛者、此冷結在膀胱閔元也。



(回陽太過、膿血便)

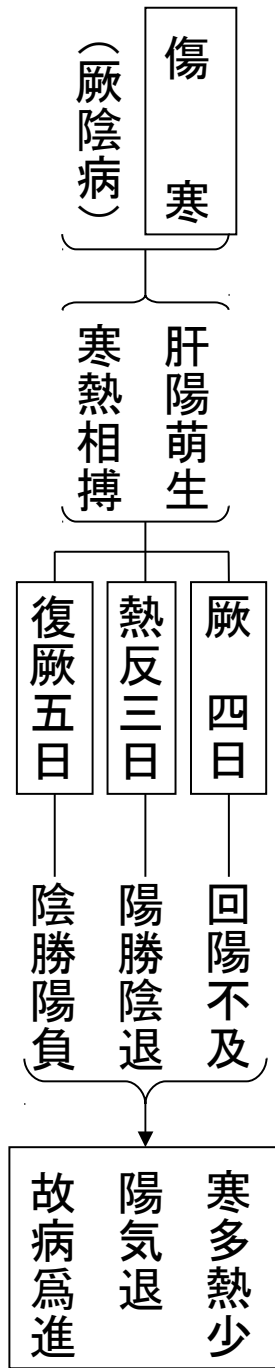
第三四一条 傷寒發熱四日、厥反三日、復熱四日。厥少熱多者、其病當愈。四日至七日熱不除者、必便膿血。



(回陽不及—爲病進行)

第三四二条 傷寒厥四日、熱反三日、復厥五日、其病爲進。

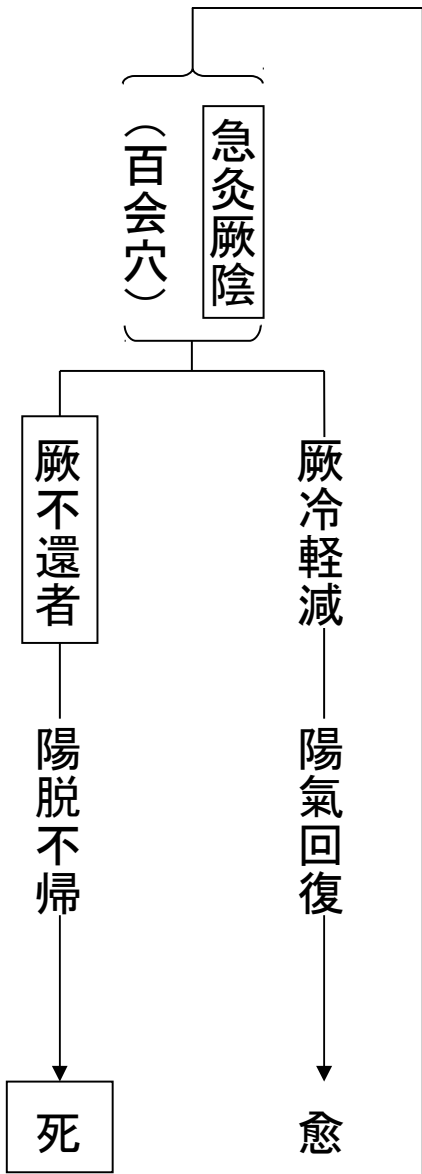
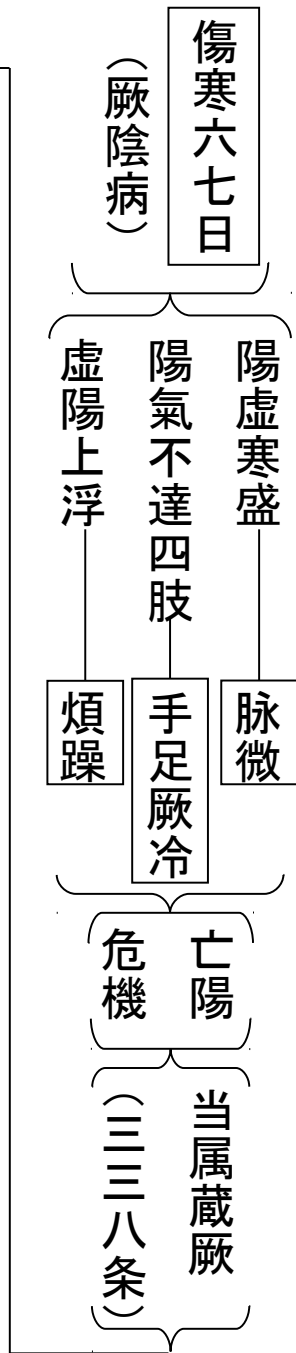
寒多熱少、陽氣退、故爲進也。



(厥陰病虛寒ノ死証①)

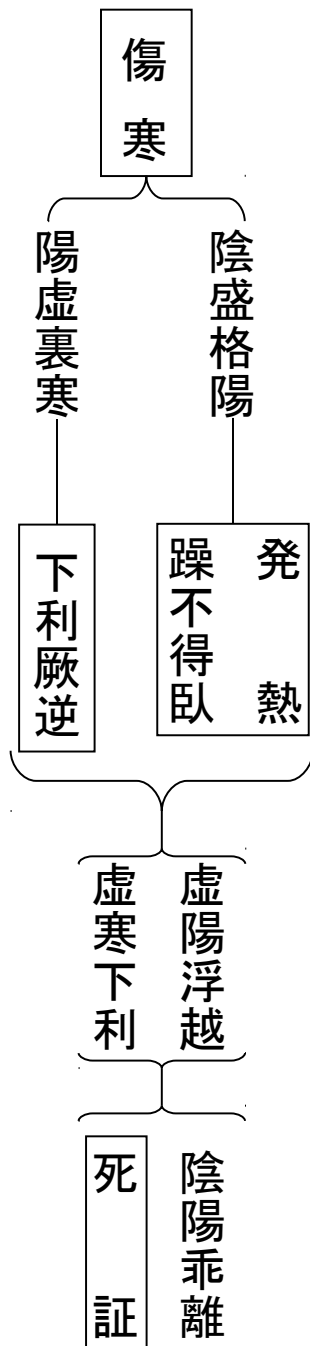
第三四三条 傷寒六七日、脉微、手足厥冷、煩躁、灸厥陰。

厥不還者、死。



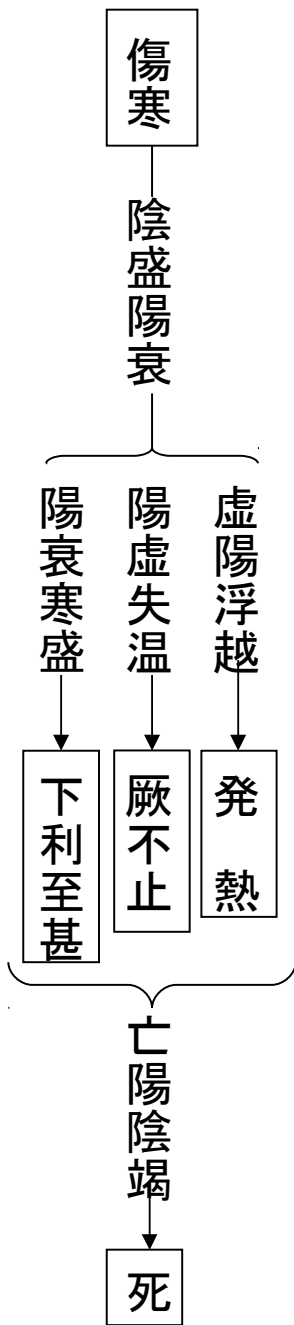
〔厥陰病虚寒ノ死証②〕

第三四四条 傷寒発熱、下利、厥逆、躁不得臥者、死。



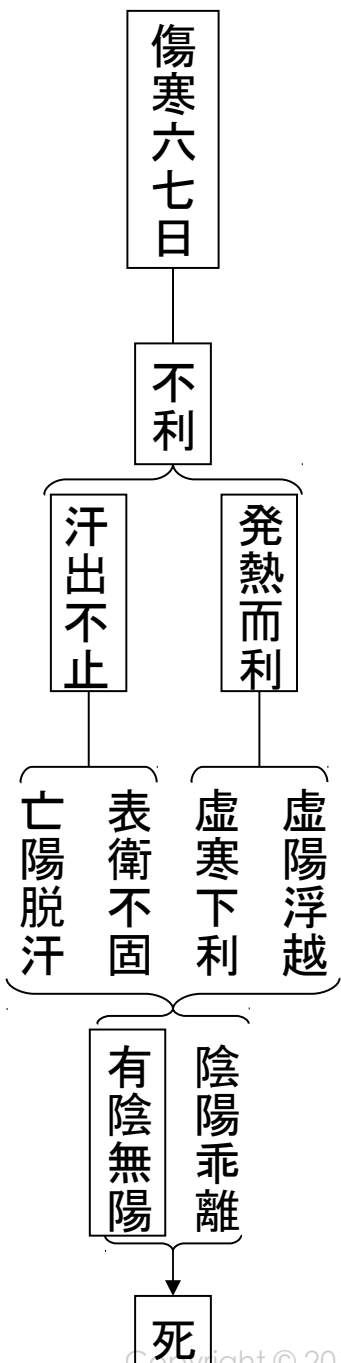
〔厥陰病虚寒ノ死証③〕

第三四五条 傷寒発熱、下利至甚、厥不止者、死。



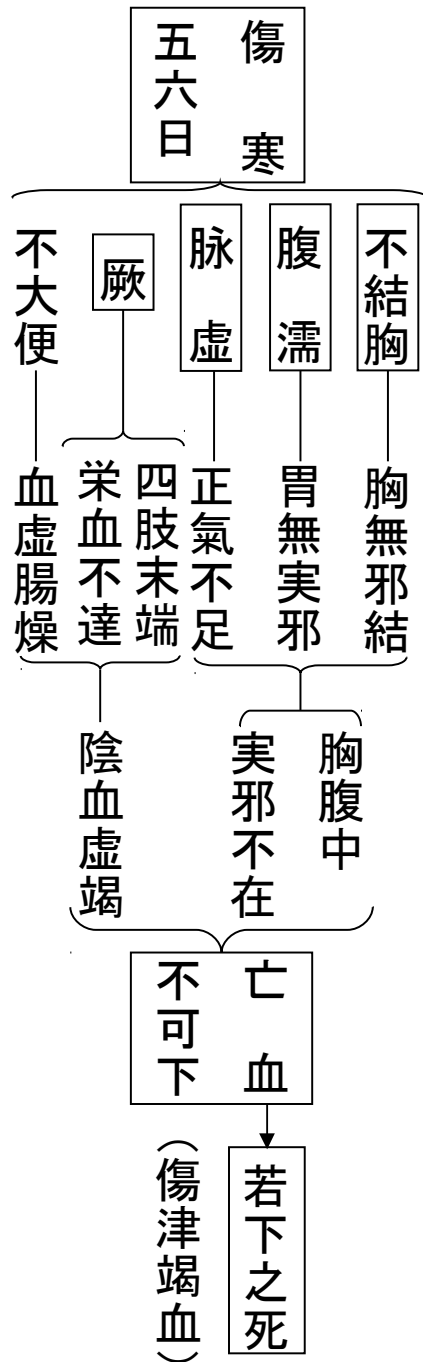
〔厥陰病虚寒ノ死証④〕

第三四六条 傷寒六七日不利、便発熱而利、其人汗出不止者、死、有陰無陽故也。



(亡血八不可下)

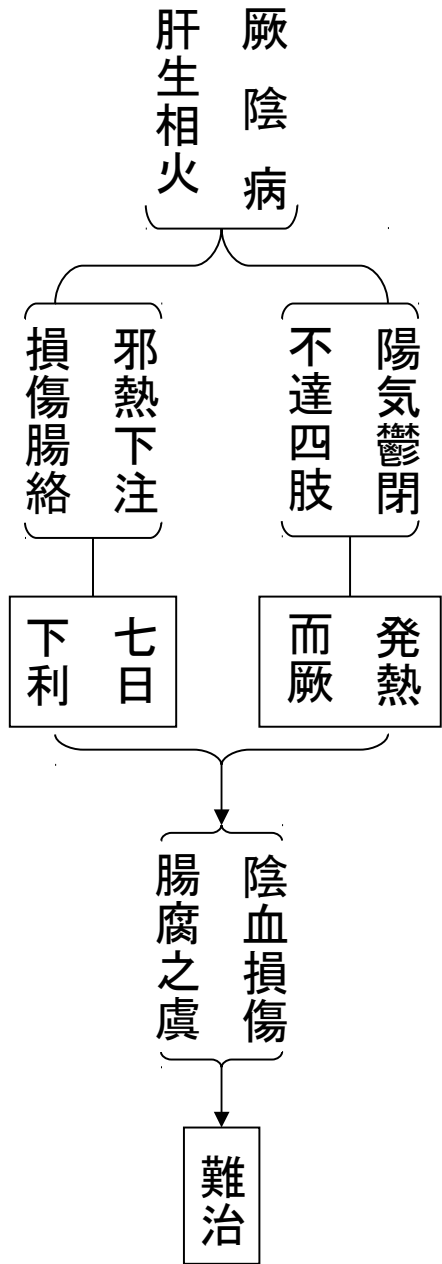
第三四七条 傷寒五六日、不結胸、復濡、脉虚、復厥者、不可下、此亡血、下之死。



(参照 三三〇条 諸四逆シテ厥ス者ハ之ヲ下スベカラズ。虚家モ亦然リ)

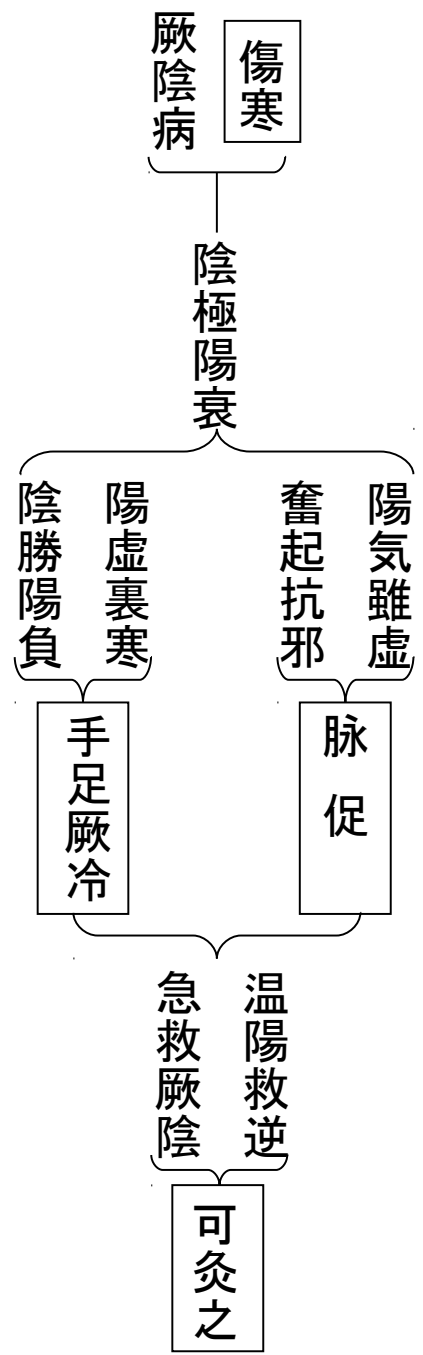
(熱厥下利ハ難治)

第三四八条 発熱而厥、七日下利者、爲難治。



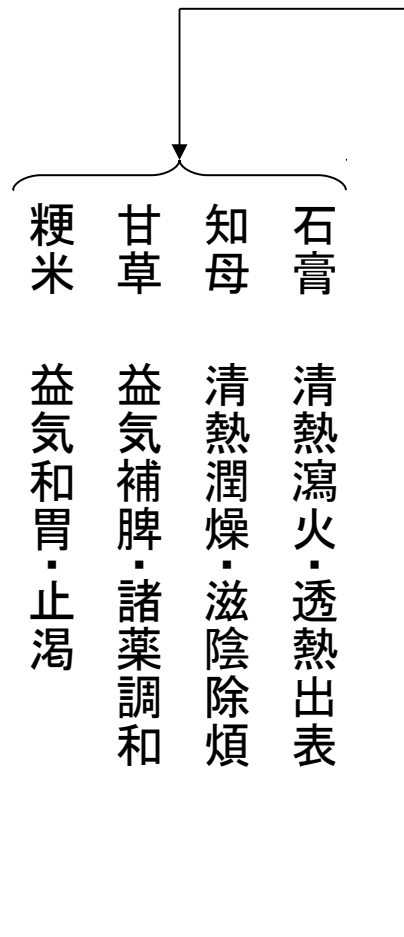
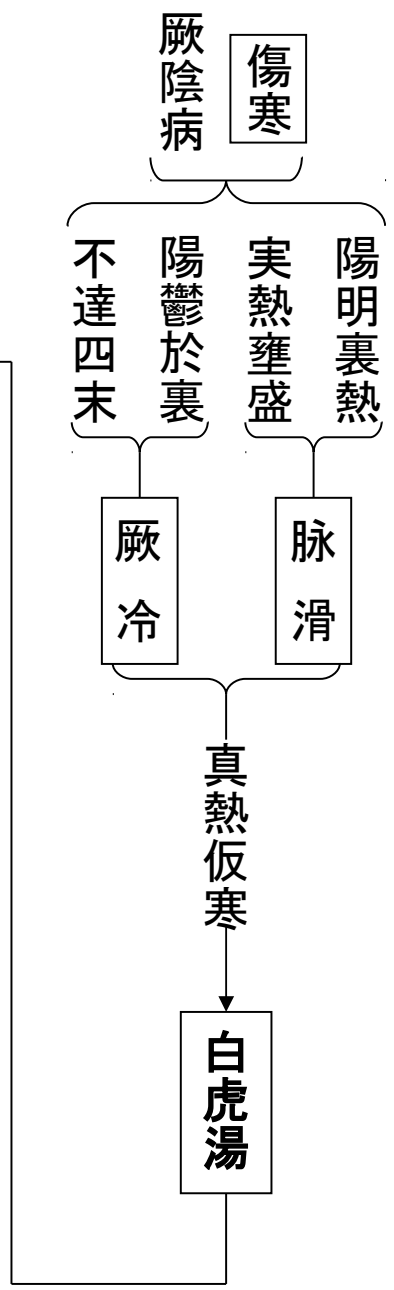
(陽虛陰盛・乏陽奮起)

第三四九条 傷寒脉促、手足厥逆、可灸之。



(陽鬱熱厥・真熱假寒)

第三五〇条 傷寒脉滑而厥者、裏有熱、白虎湯主之。



厥陰病内熱外寒証を清解する

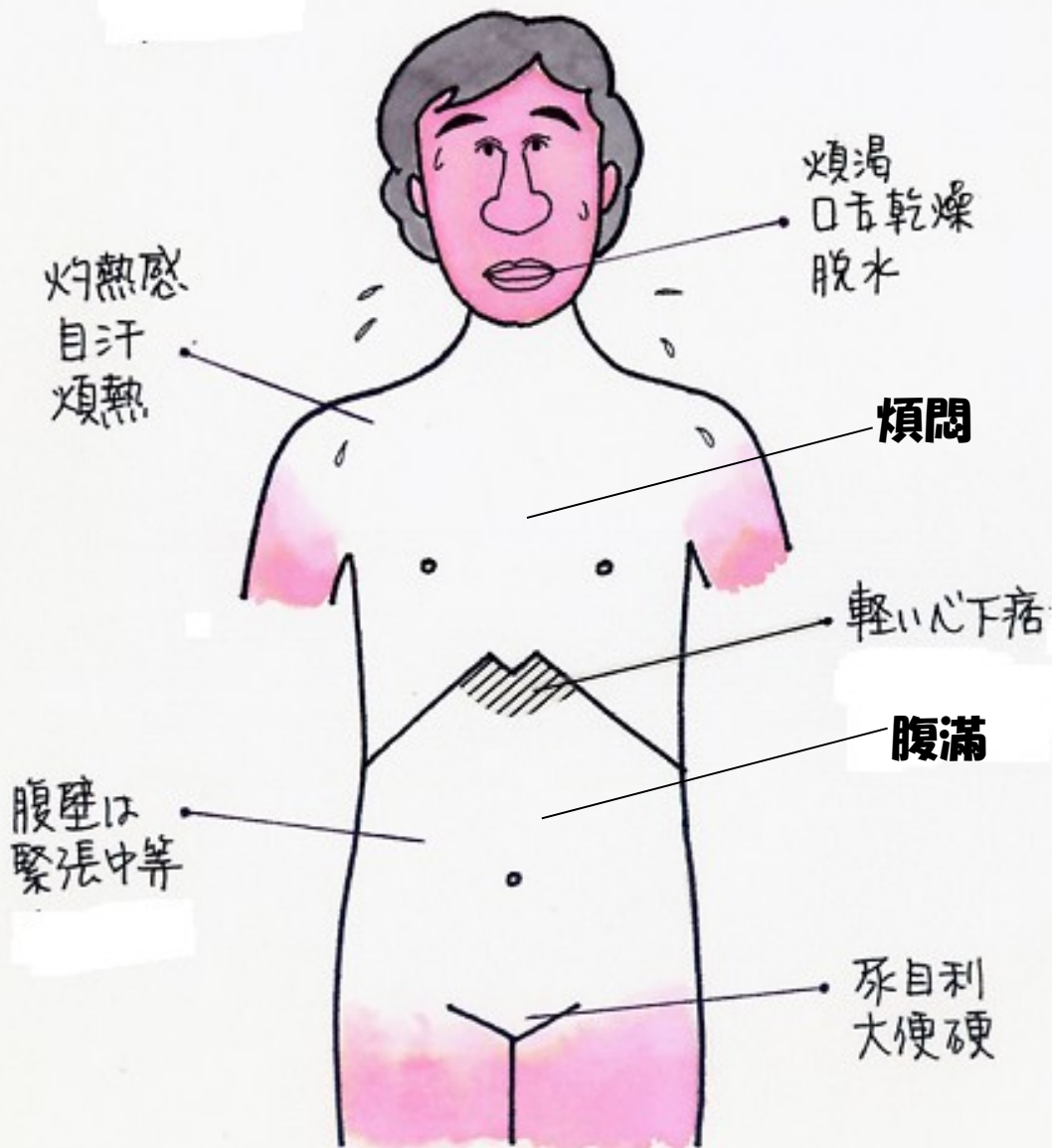
白虎湯の証

方意

陽明経は気血俱に旺盛であるので陽明経病では全身の内外上下及び肌肉皮毛に邪熱が充満して、高熱、悪熱を呈し、焦燥煩悶する。

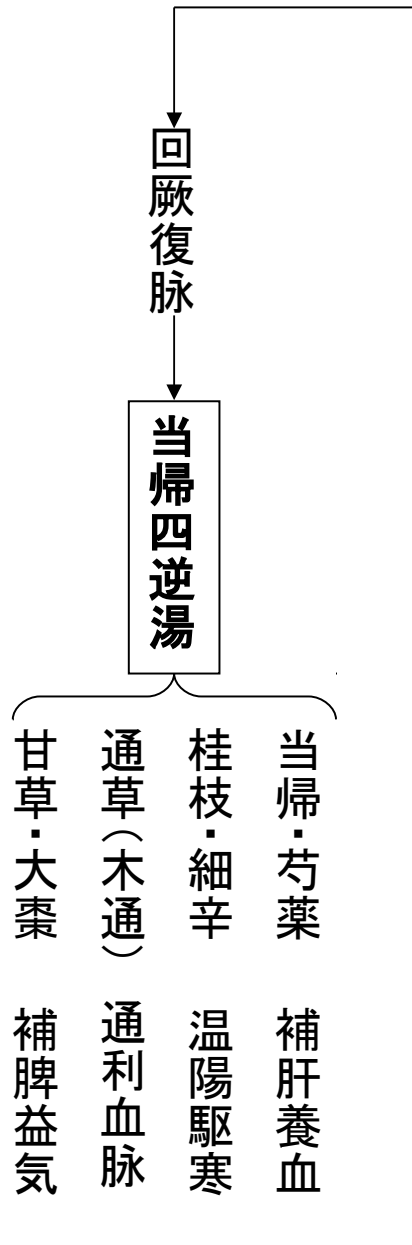
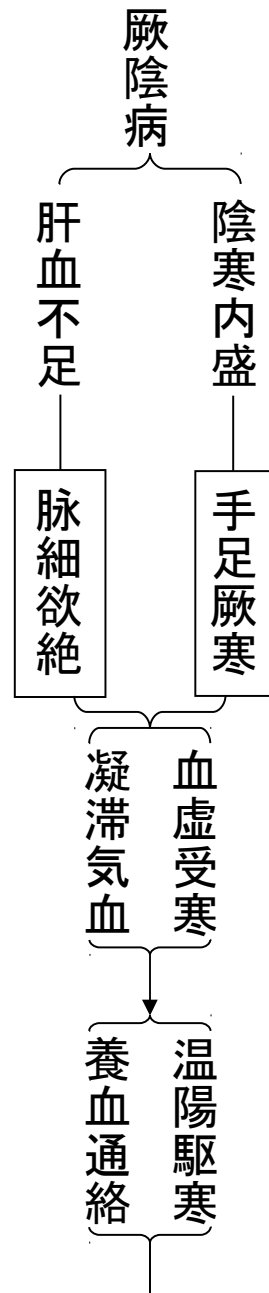
実熱証であるので口渴冷飲を欲し、裏熱が津液を蒸迫するので汗が出、津液は消耗するので口渴乾燥する。本方は厥陰病で陽明の実熱が裏に鬱して四肢厥冷する真熱仮熱証でも用いられている。

弁証の4大キーワードは
大熱、大汗、大渴、脉洪大



(厥陰病、血虚受寒)

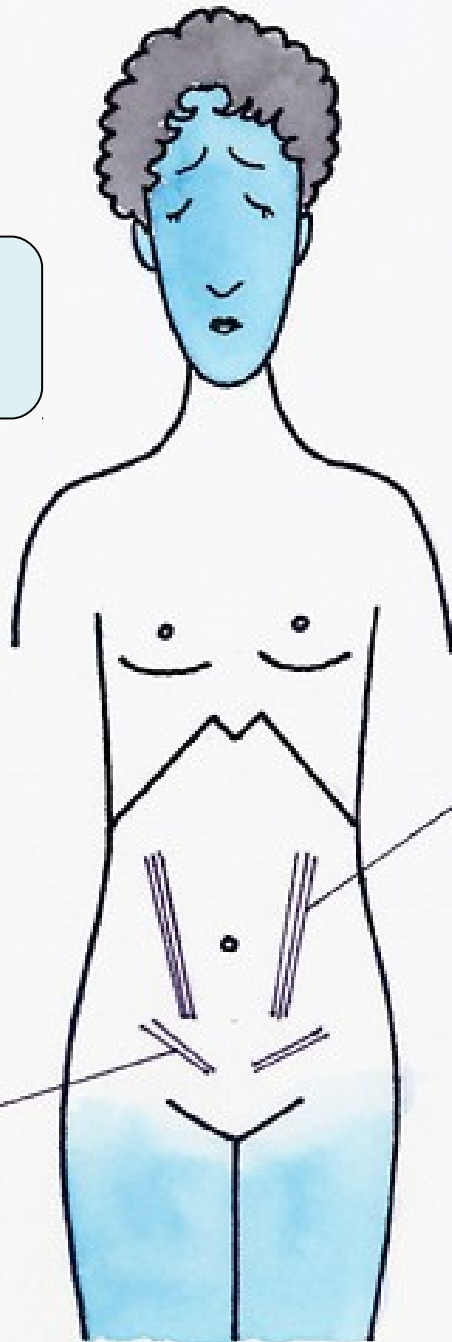
第三五一条 手足厥寒、脉細欲絶者、当帰四逆湯主之。



当帰四逆湯の証 *

厥陰病

冷えと血虚



腹直筋は緊張
(腹皮拘急)
しているが
腹壁全体は
軟弱

下腹部を左右
或は一方に
圧痛と索状の
抵抗を触れる

方 意

厥陰病で肝血虚がある処に寒邪を感受したものである。その為血が四肢を栄養・温煦できず、四肢が厥冷する。

雑病では厥陰肝経脈に沿って冷えがある者、或は血虚に冷え症を伴った者に用いる。臨床的には四肢の凍瘡、冷えに因る腹痛、月経異常、不妊等に良い。

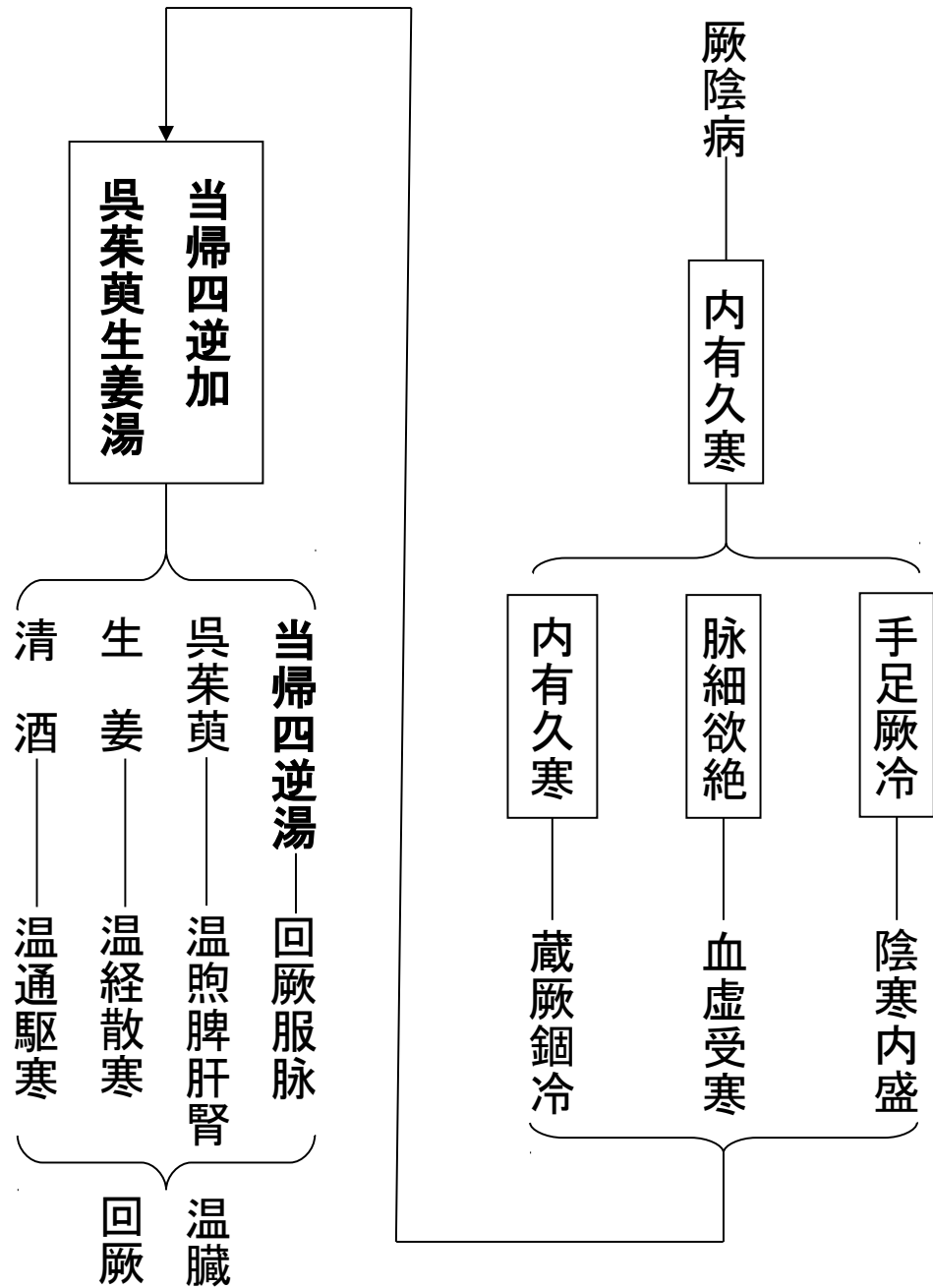
脈は血虚の脈で細・微弱。

舌は淡白、薄白苔。

腹部は下腹部に索状抵抗圧痛。

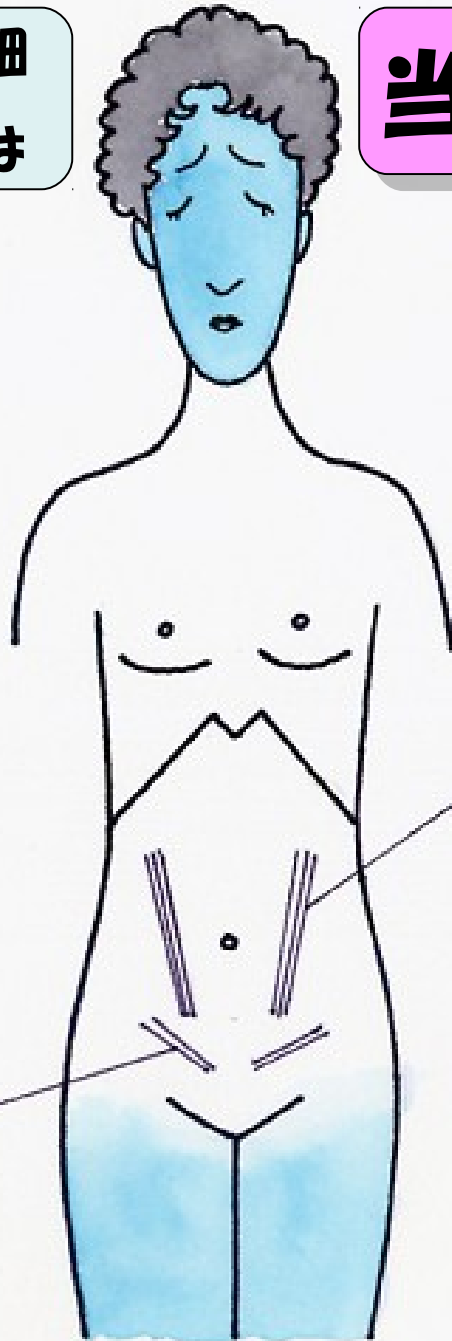
(血虚寒凝、藏厥)

第三五二条 若其人内有久寒者、宜当帰四逆加呉茱萸生姜湯。



厥陰病厥寒脉細
内に久寒有るは

当帰四逆加湯呉茱萸の証



下腹部を左右
或は一方に
圧痛と索状の
抵抗を触れる

腹直筋は緊張
(腹皮拘急)
しているが
腹壁全体は
軟弱

方意

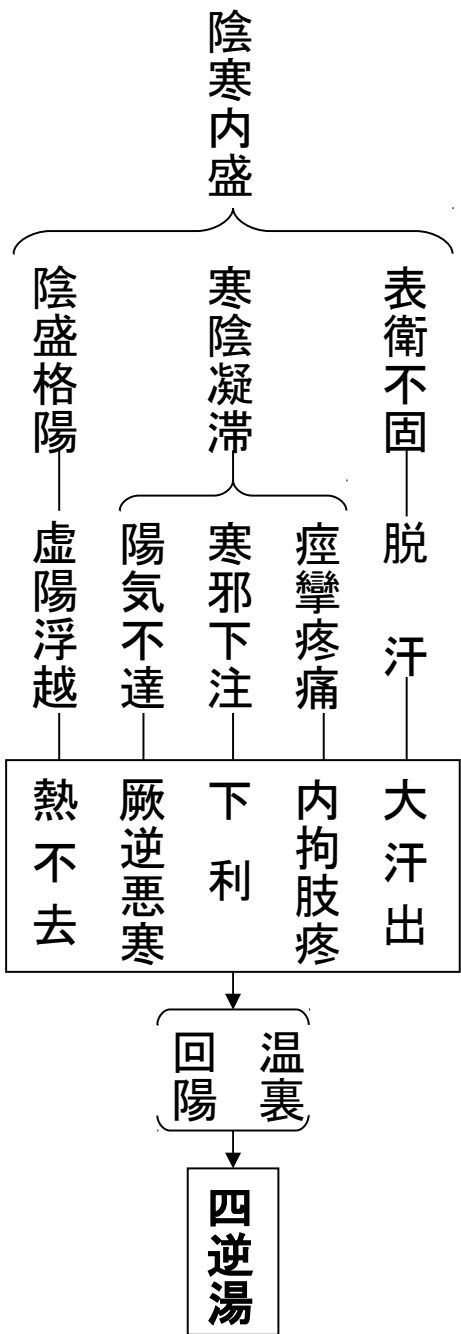
厥陰病で肝血虚がある処に寒邪を感受したものは当帰四逆湯の証である。更に厥陰の臓である肝が冷えて疏泄が滞り、その為血も陽気も行らず、陽気は全身を温煦できず、血は四肢を栄養できないので、四肢の厥冷、凍瘡や下焦の冷えに因る腹痛、月経異常、不妊等を起す。

弁証

脉は血虚の脉で細・微弱。
舌は淡白、薄白苔。
腹部は下腹部に索状抵抗圧痛。

(陰盛格陽・汗出厥逆)

第三五三条 大汗出、熱不去、内拘急、四肢疼、又下利厥逆而
 惡寒者、**四逆湯**主之。



(誤治・下利厥冷)

第三五四条 大汗、若大下利而厥冷者、**四逆湯**主之。



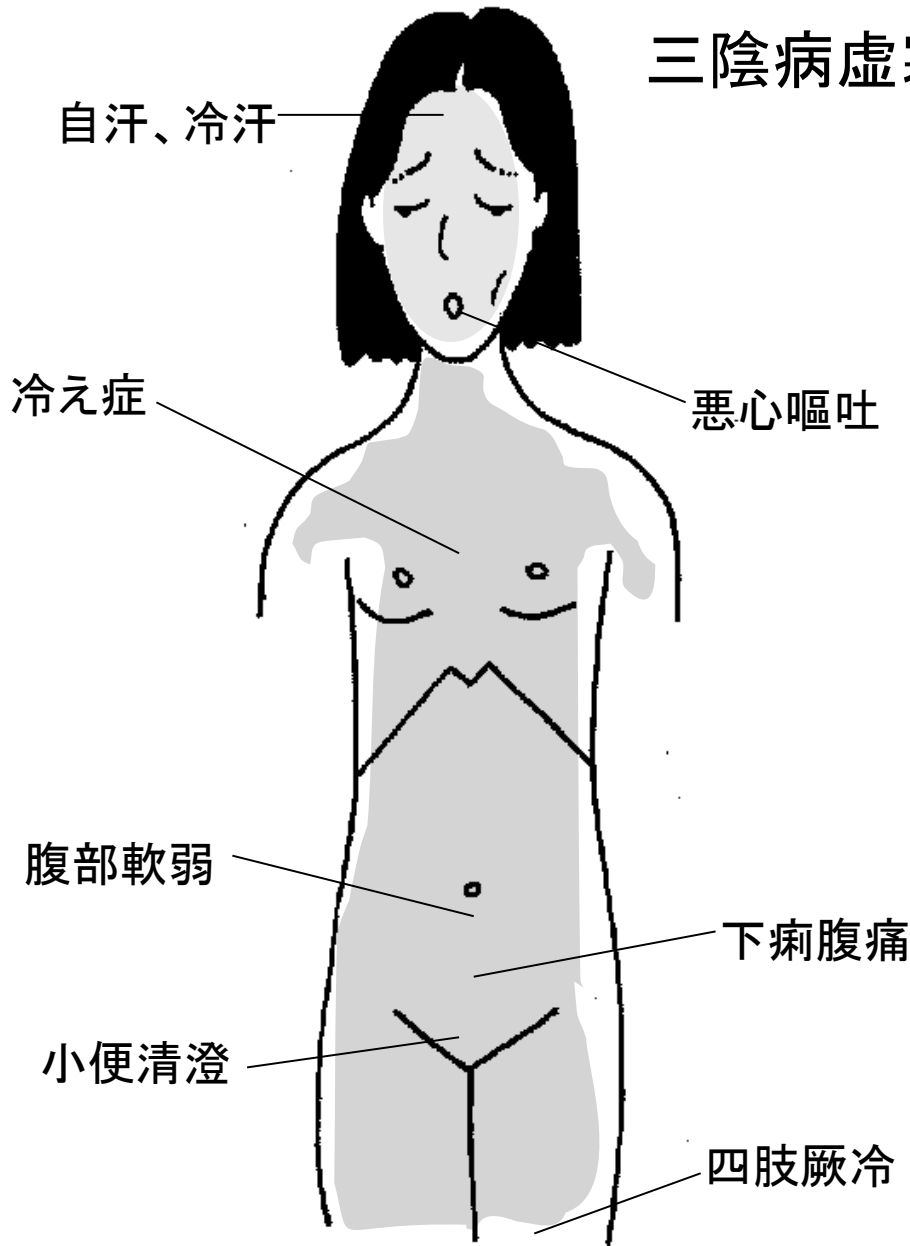
参考条文

第九一条 傷寒、医下之、続得下利清穀不止、身疼痛者、急当救裏。

第九二条 病発熱、頭痛、脉反沈、若不差、身疼痛者、当救其裏、**四逆湯**。

第二二五条 脉浮而遲、表熱裏寒、下利清穀者、**四逆湯**主之。

三陰病虚寒証の基本処方は**四逆湯***



方意

少陰病の腎陽虚証を主治する基本処方で回陽救逆を主る。

腎陽が虚して陰寒内盛に陥った時、或は亡陽して虚脱に陥った時は何病に限らず第一選択で用いられる。

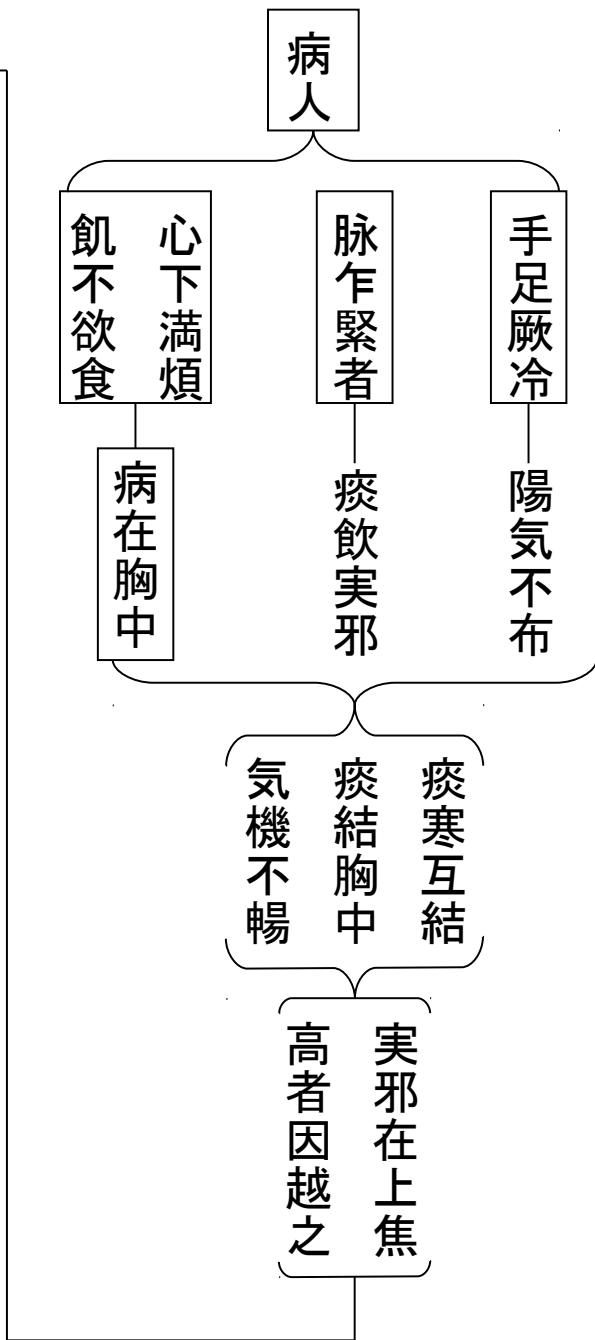
少陰病だけでなく、太陰病、厥陰病の、裏寒証、あるいは陰陽両虚の場合に広く活用される陰病の主方である。

弁証のTrias

- 1) 冷え症、下痢傾向
- 2) 手足厥冷
- 3) 倦怠感強く、不活発

(痰厥)

第三五五条 病人手足厥冷、脉乍紧者、邪結在胸中、心下滿而煩、飢不能食者、病在胸中、当須吐之、宜瓜蒂散。

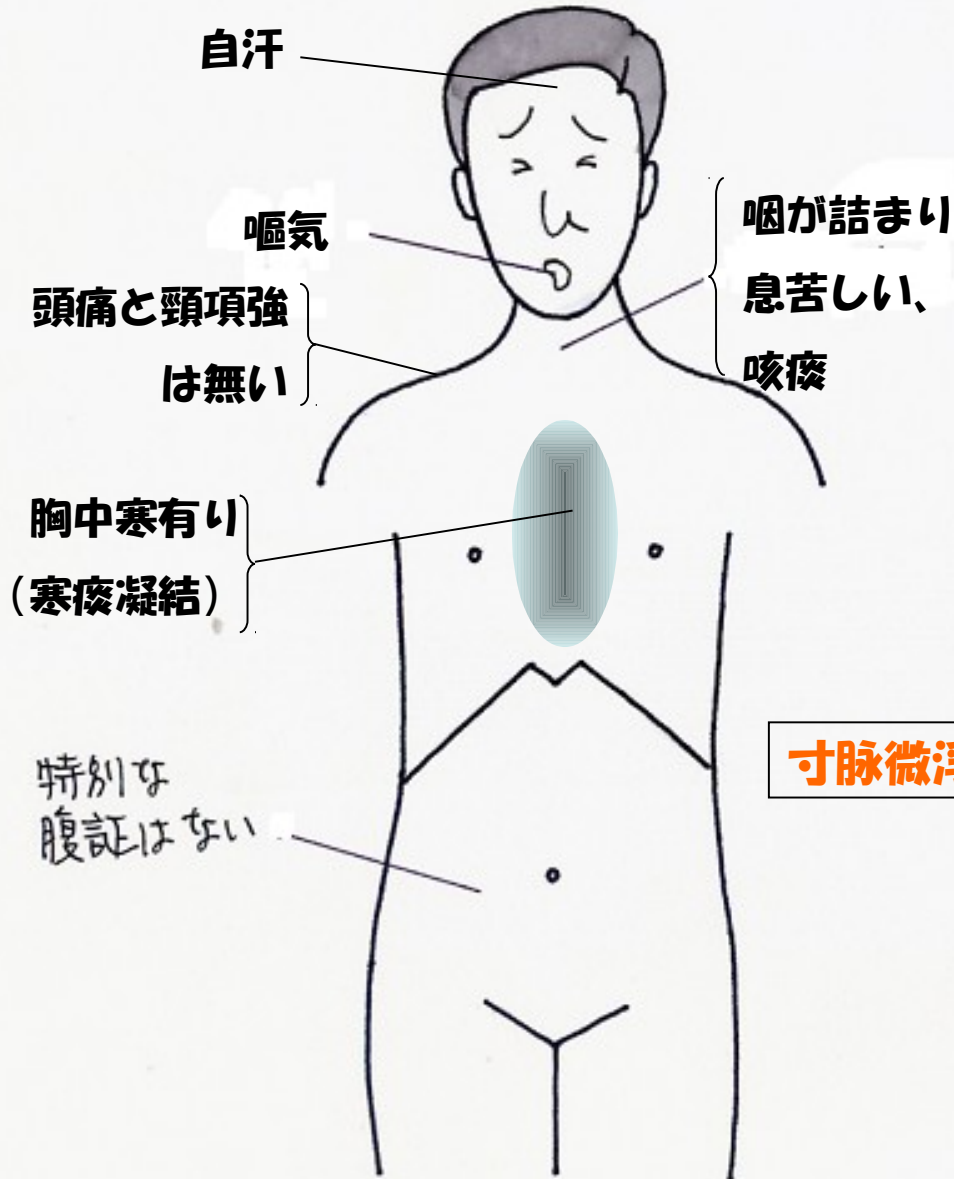


(参考条文)

一六六条 病桂枝ノ証ノ如クアレドモ、頭痛マズ、項強バラズ、寸脉微力ニ浮、胸中痞鞭シ、気咽喉ニ上衝シテ息スルヲ得ザル者ハ此胸ニ寒有リト爲スベシ。当ニ之ヲ吐スベシ。瓜蒂散ガ宜シ。

三二四条 少陰病、飲食口ニ入レバ則チ吐ス。心中温タトシテ吐サント欲スレド復タ吐ス能ワズ。始メテ之ヲ得、手足寒ク脉弦ノ者ハ此胸中実タリ、下スベカラザルナリ、当ニ之ヲ吐スベシ。(以下略)

胸中寒痰の実邪は



瓜蒂散の証

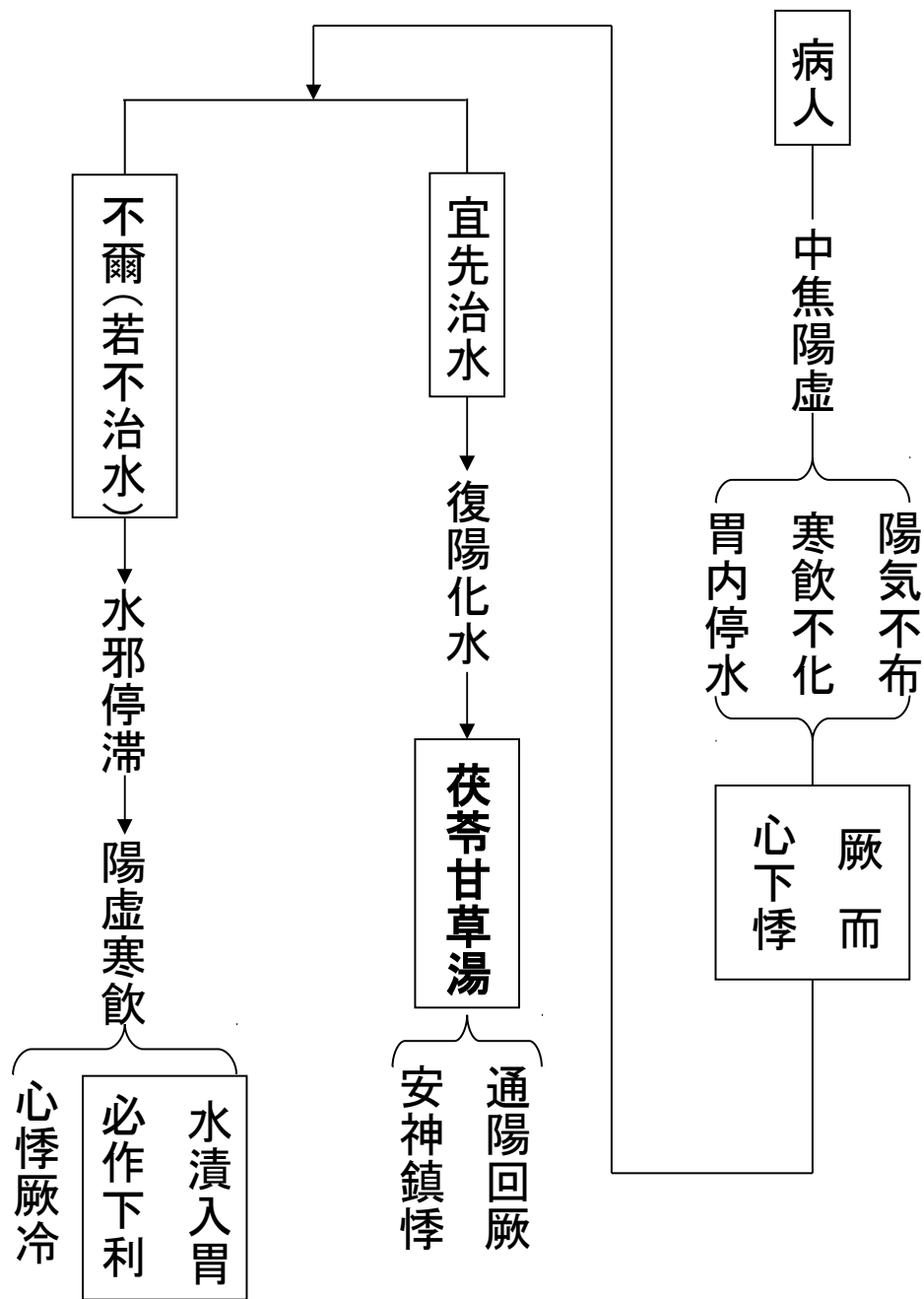
方意

本来胸膈に寒飲が壅塞している為、胸中に痞鞭を生じ、痰飲が上逆しようとするので胸苦しい、咽喉が詰まって息苦しい、嘔気がある、などの症状がある。

胸中の痰飲停滞に因り衛気の上昇が妨げられる結果、体表の榮衛が不和となって、一見太陽中風証に似た発熱悪寒、自汗などを呈す。脈は微浮で頭痛や頸項強は無い。胸中の実邪は苦酸の剤で吐かせる。

(飲 厥)

第三五六条 傷寒厥而心下悸、宜先治水、当服茯苓甘草湯、却治其厥、不爾、水漬入胃、必作利也。



(注) 心下に寒飲が停滯したため、中焦の陽気が阻滯され上焦にも四肢にも巡らないため、心下の動悸や手足の厥冷が生じるものである。陽気の虚を生じた直接の原因は胃内の水飲にあるので、温胃散水の茯苓甘草湯を與えて中焦の水邪を化せば、動悸も厥も自然に治る。

茯苓甘草湯

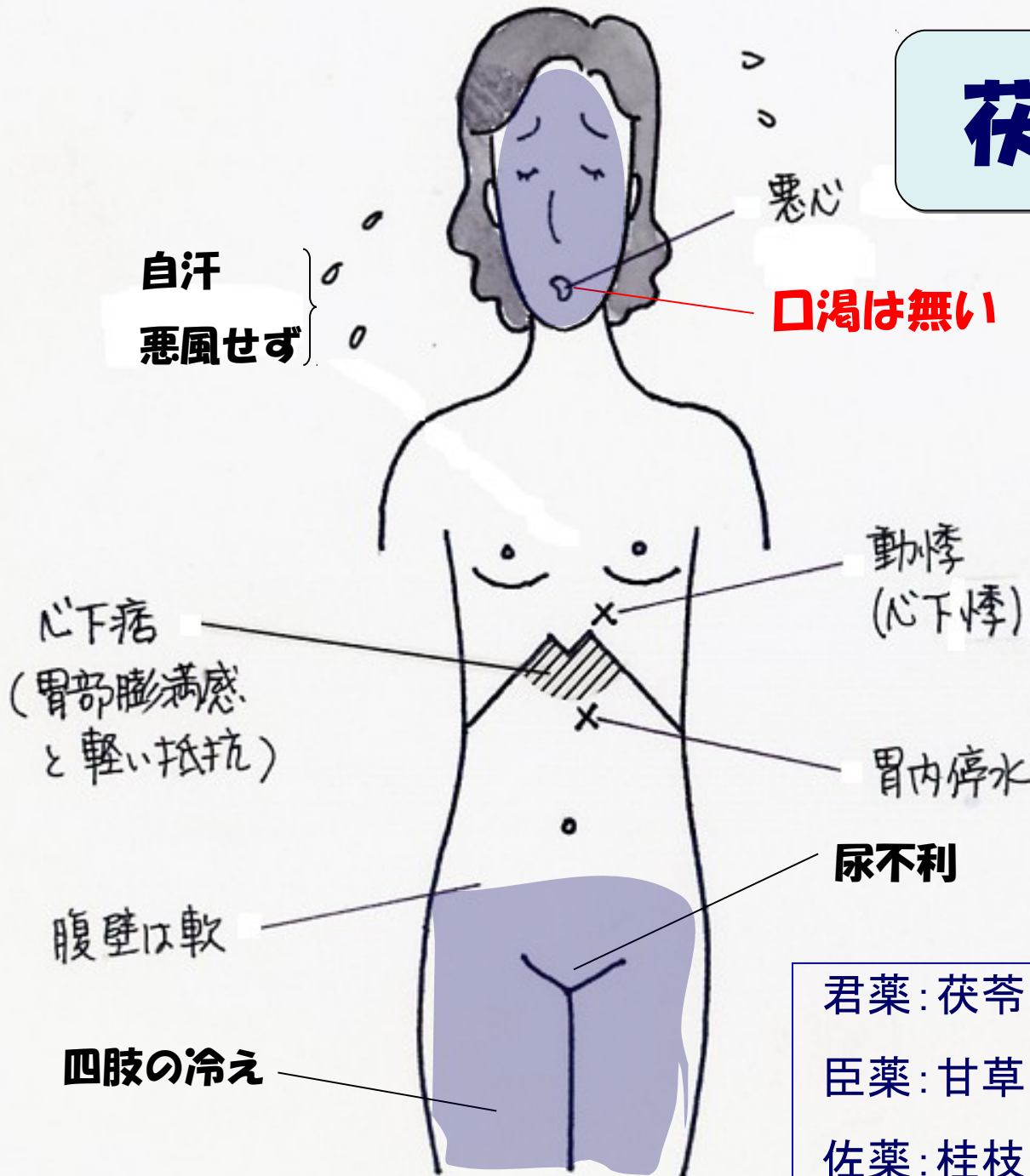
方意

厥陰病篇356条の茯苓甘草湯証は、胃内に寒飲が貯留停滞する結果、陽気が鬱滞させられて行らず、心下悸や四肢厥冷を生じるものである。本方で中焦を温め、化飲利水してやれば、陽気は開放されて能く行き、諸証は自然に除かれる。

君薬：茯苓、益津、和胃、利尿。

臣薬：甘草、補脾、水飲吸収を正常化。

佐薬：桂枝、温経、固表。使薬：生姜。



(誤下、邪陷陽鬱、厥逆)

第三五七条 傷寒六七日、大下後、寸脉沈而遲、手足厥逆、

下部脉不至、喉咽不利、唾膿血、泄利不止者、爲難治。

麻黄升麻湯主之。

傷寒六七日

表証未解

裏實初結

大下

表邪内陷

邪陷陽鬱

中陽虚損

陽熱不達

邪陷陽鬱

寸脉沈遲

陰陽兩虚

下部脉不至

陽熱不達

手足厥逆

陰虛火旺

喉咽不利

燒灼肺絡

吐唾膿血

陽傷脾寒

泄利不止

陰陽兩虚

虛實混交

寒熱併現

寒熱錯雜

上熱下寒

難治

發越鬱陽

清肺温脾

解表滋陰

麻黄升麻湯

麻黄·升麻·桂枝

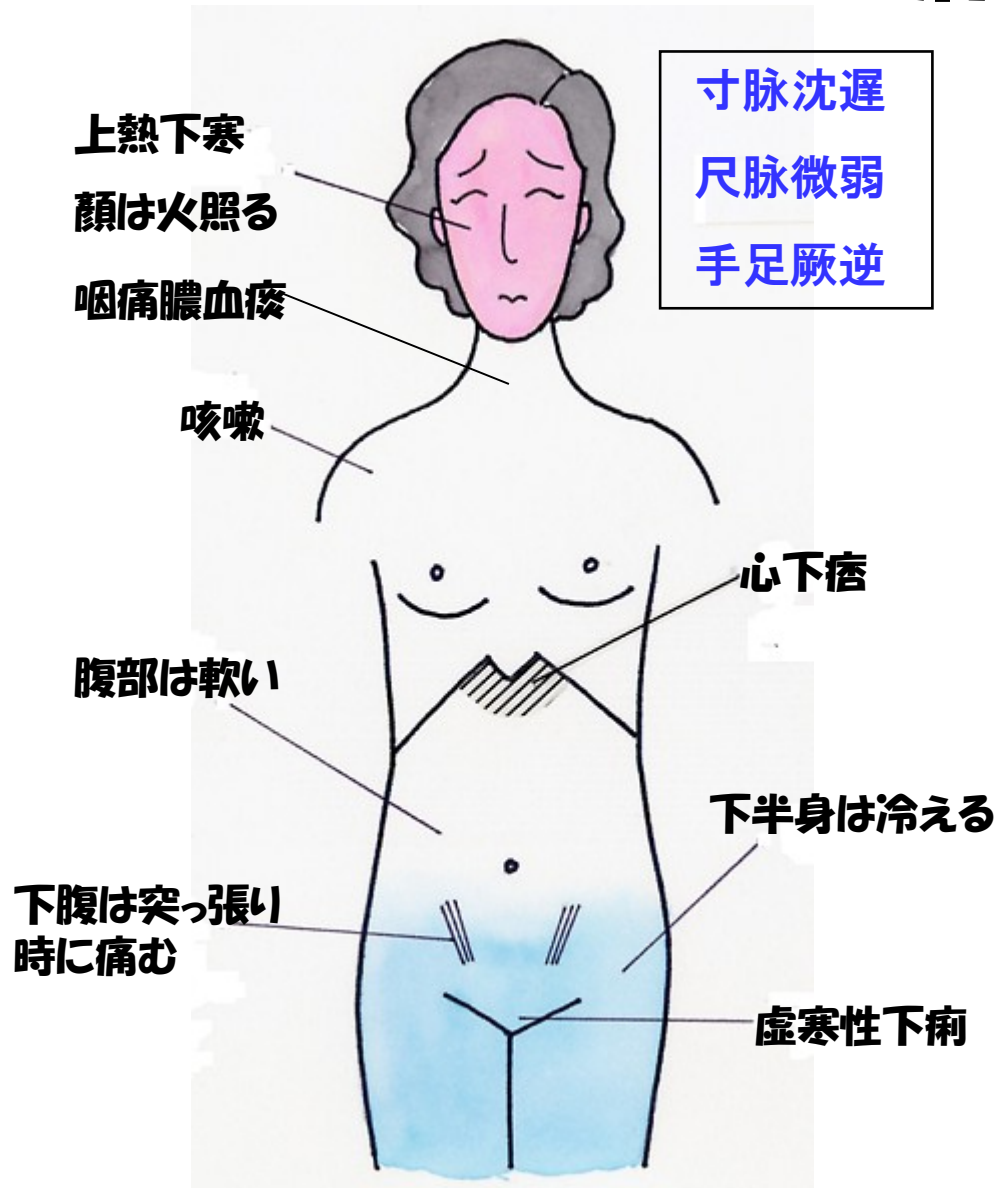
当歸·芍藥

黄芩·知母·石膏

玉竹·天門冬

白朮·茯苓·甘草·乾姜

誤下による陽鬱の厥は 麻黄升麻湯の証



方意

太陽病の邪が一部陽明に転じたが陽明腑証が完成される前に誤下した結果生じた壞病である。四肢厥逆を主証とするので厥陰病篇に編入されている。

誤下に困り表邪が内陷すると同時に陽気は内鬱させられて四肢まで外達できなくなるので手足厥逆を生じる。

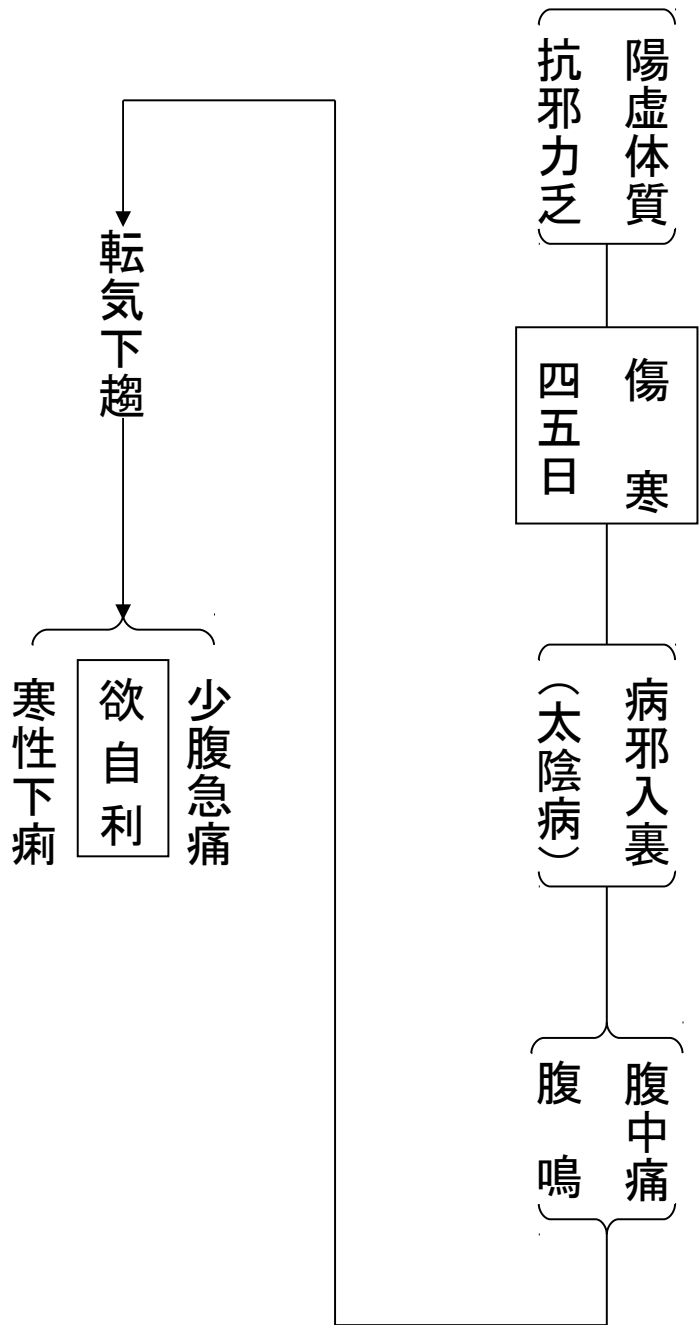
誤下の後は陰陽が共に損傷されるので、寸脉沈遲・尺脉微弱となる。

陰虚火旺の虚熱が肺に上擾するので咽喉痛と膿血痰を吐す。一方脾陽虚に因る虚寒性の下利が止まらない。

病状は寒熱錯雜、虚実混交である。

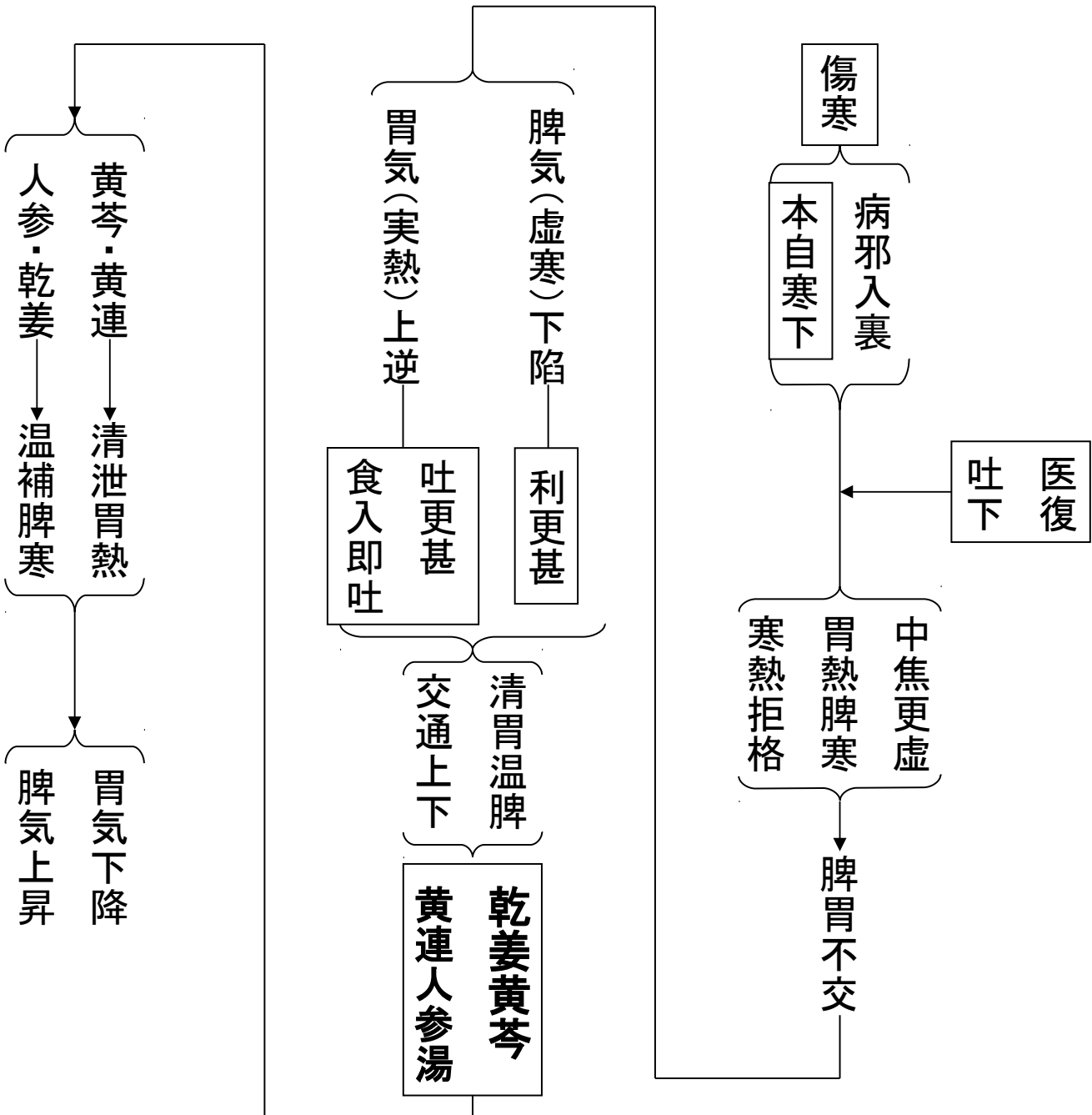
(寒 利)

第三五八条 傷寒四五日、腹中痛、若轉氣下趨少腹者、此欲自利也。

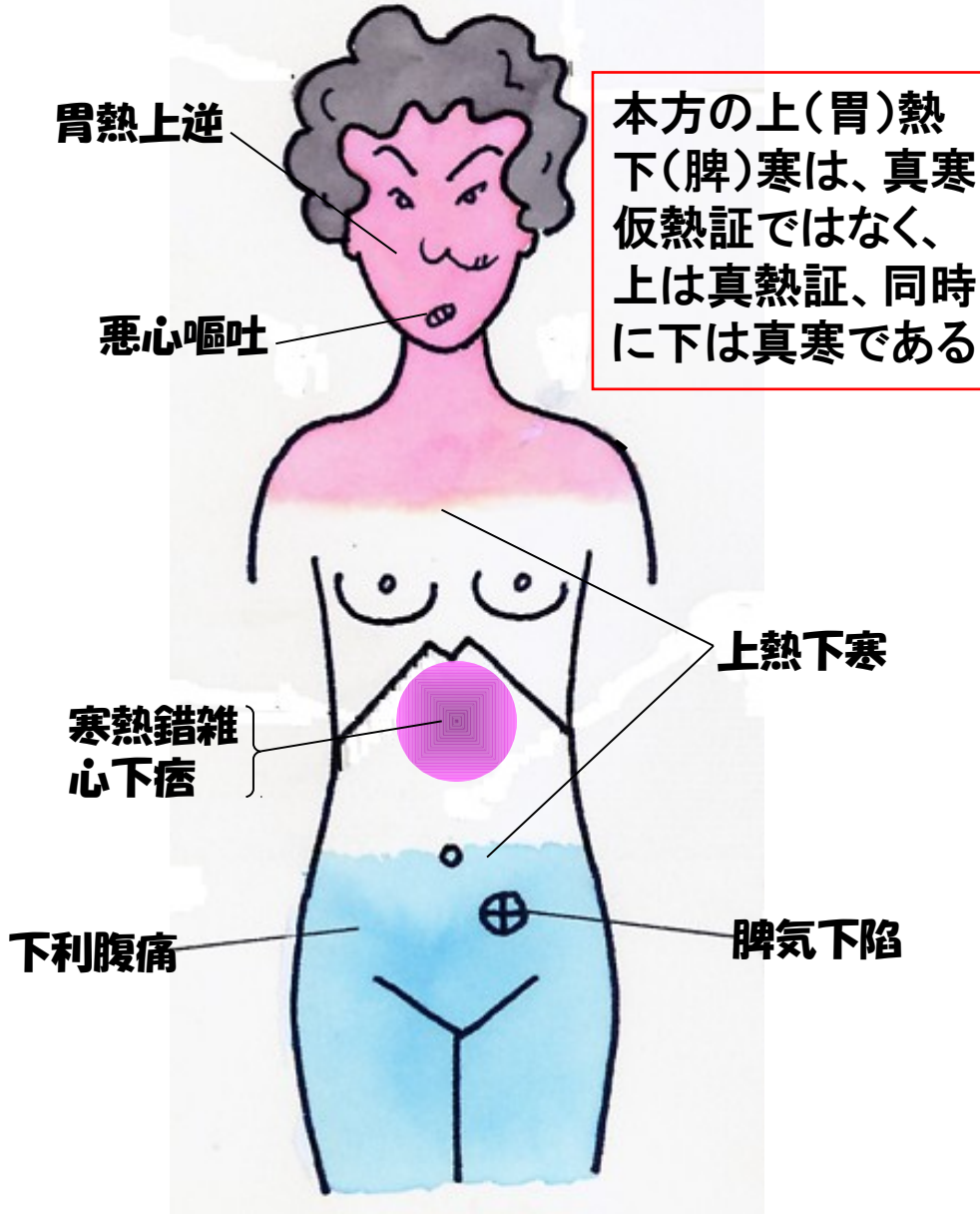


(誤治、陰陽格拒)

第三五九条 傷寒本自寒下、医復吐下之、寒格、更逆吐下。若食入口即吐、乾姜黄芩黄連人参湯主之。



壊病の上熱下寒は**乾姜黄芩黄連人参湯**の証



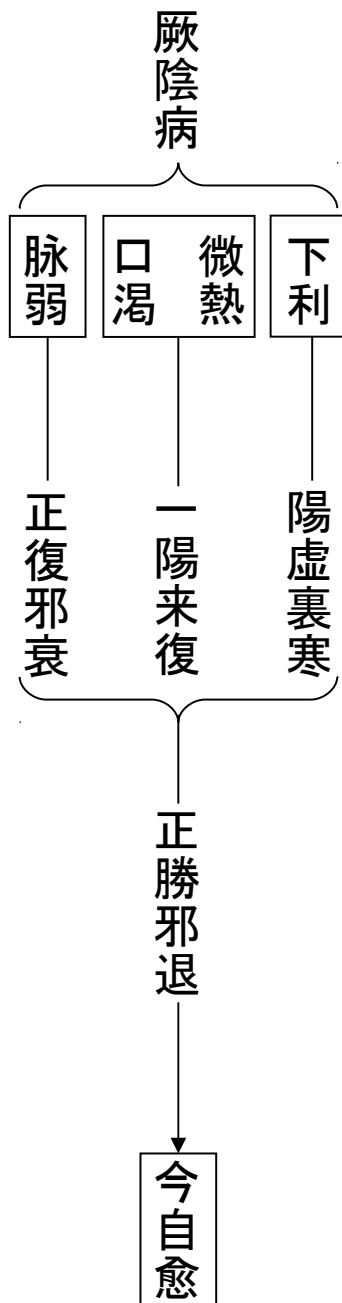
方意

傷寒が自然経過で太陰病に転化して、虚寒性の下利を呈していたのを、実熱性下痢と誤診して、吐法や瀉下を施して壊病となり、脾は更に虚して脾の虚寒は益々甚しく、表邪が内陷して胃熱は益々旺盛になった。胃熱は脾寒に拒格されて正常に下降できず上逆するため烈しい嘔吐を生じ、脾寒は正常に上昇できず下陷するため虚寒性の下利が止まらなくなる。

本方は黄芩・黄連で胃の実熱を清泄、乾姜と人参で脾の虚寒を温補し、脾胃の気が正常に昇降して交るようにする。

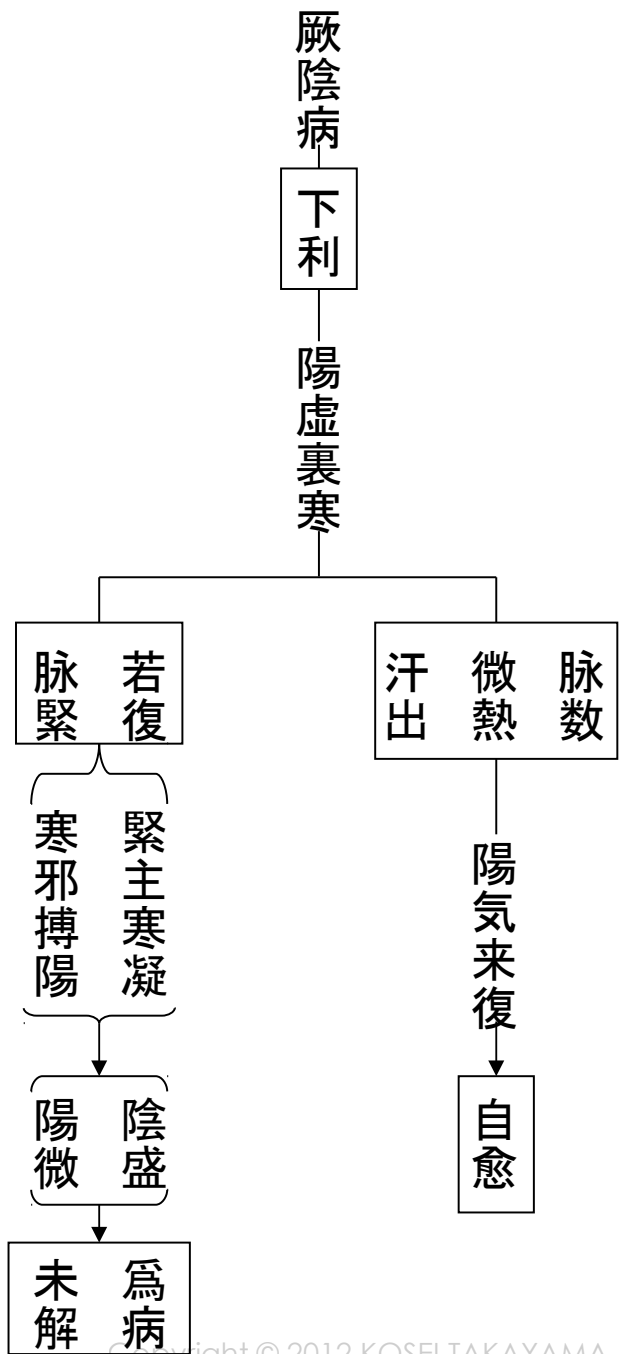
(厥陰下利の予後①)

第三六〇条 下利有微熱而渴、脉弱者、今自愈。



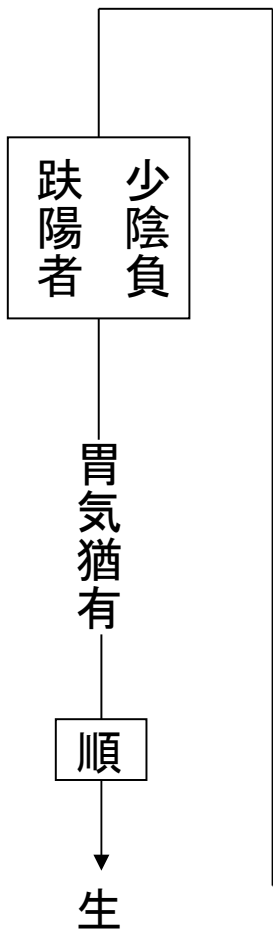
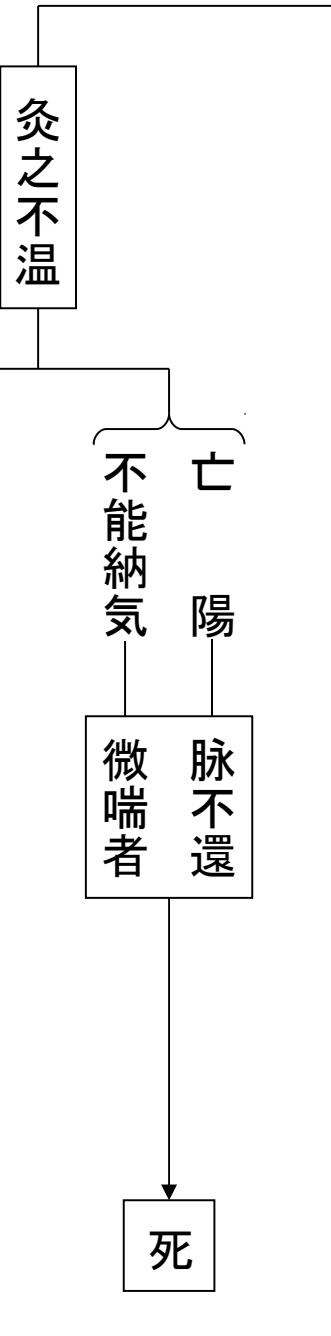
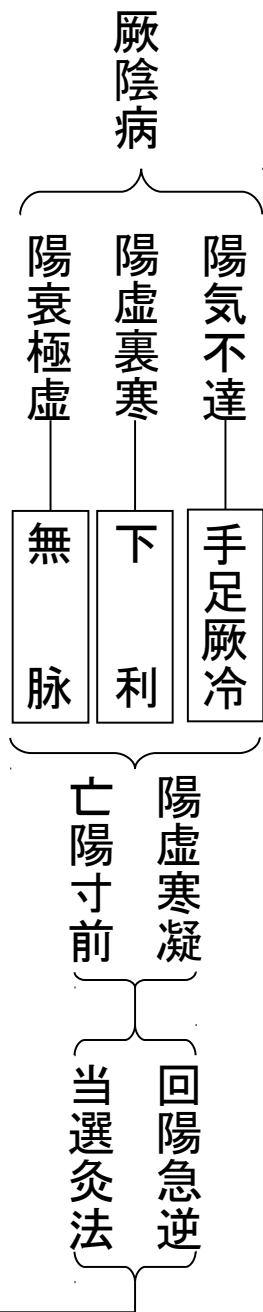
(厥陰下利の予後②)

第三六一條 下利脉数、有微熱汗出、今自愈。設復緊、爲未解。



(厥陰下利の予後③)

第三六二条 下利、手足厥冷、無脉者、灸之不温、若脉不還、反微喘者、死。少陰負跌陽者、為順也。

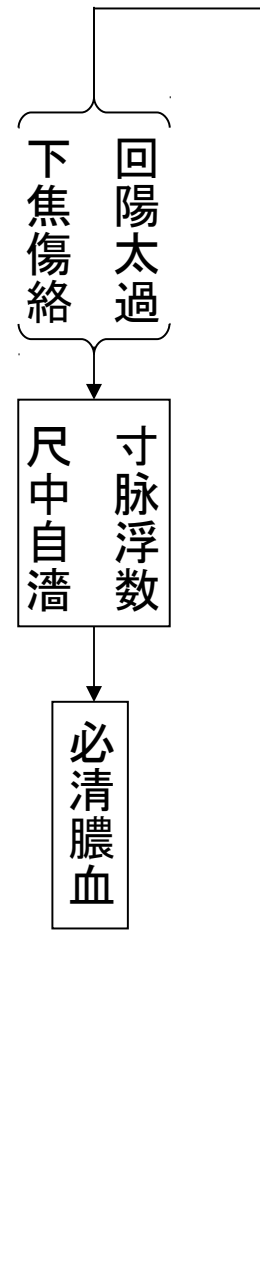
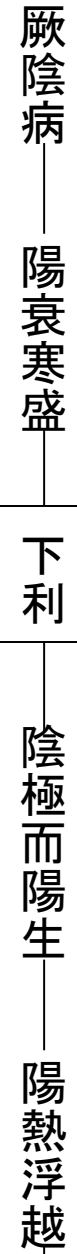


(参考条文)

第三一五条 少陰病、下利シテ脉微ノ者ハ白通湯ヲ與ウ。利止マズ、厥逆シテ脉無ク、乾嘔シテ煩ス者ハ白通湯加猪胆汁湯之ヲ主ル。

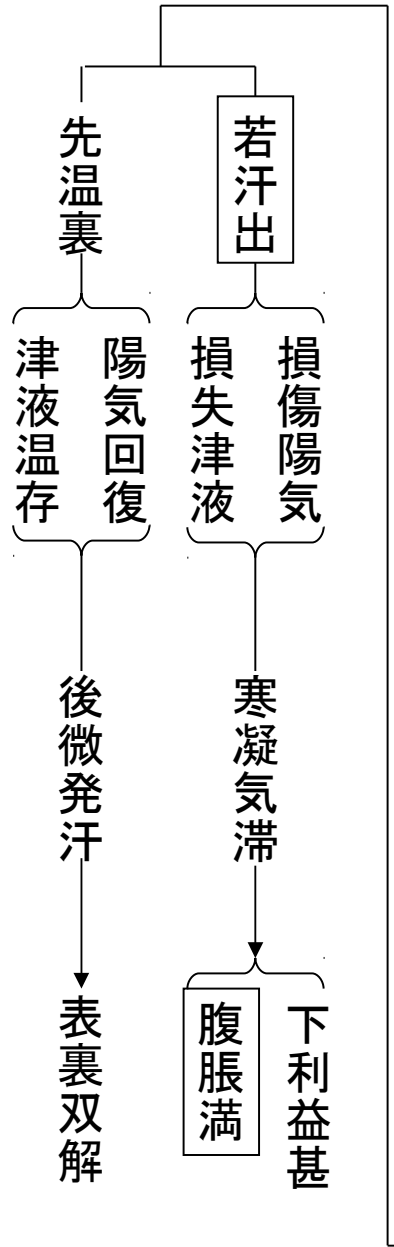
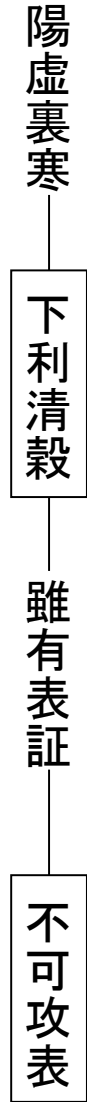
(厥陰下利の予後④)

第三六三条 下利、寸脉反浮数、尺中自濇者、必清膿血。



(厥陰下利の予後⑤)

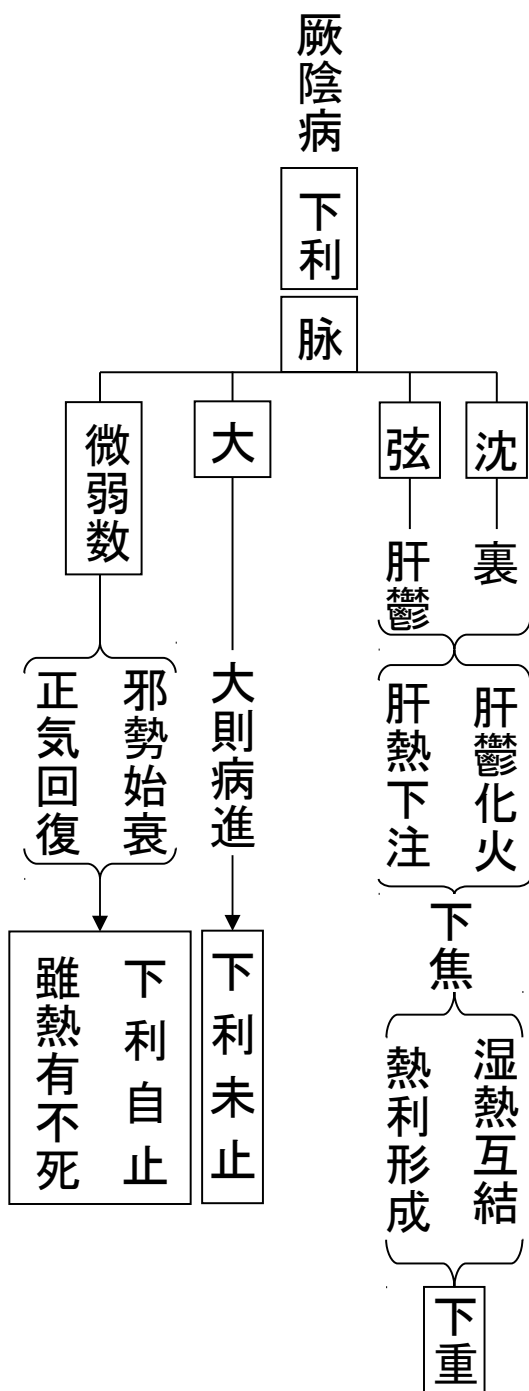
第三六四条 下利清穀、不可攻表。汗出必脹滿。



(厥陰下利の予後⑥)

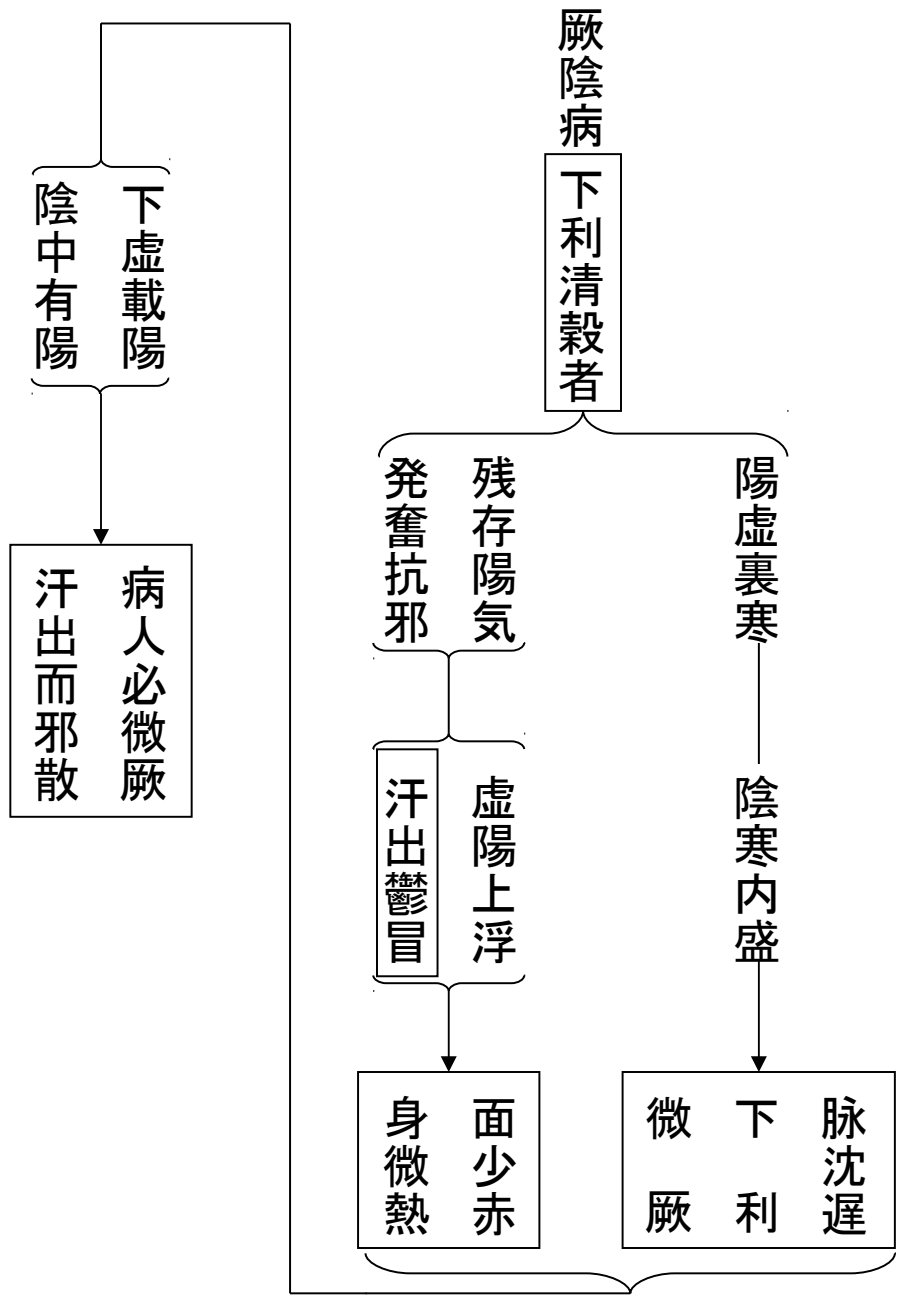
第三六五条 下利、脉沈弦者、下重也。脉大者、爲未止。

脉微弱数者、爲欲自止、雖発熱不死。



（厥陰下利の予後⑦）

第三六六条 下利脉沈而遲、其人面少赤、身有微熱、下利清穀者、必鬱冒汗出而解、病人必微厥、所以然者、其面載陽、下虛故也。



眞寒仮熱(見せかけの熱証)

実態は寒証であるのに、外見的には熱証を現すもの。此の場合寒は眞証であり、熱は見せかけの仮証である。外熱裏寒、或は表熱裏寒ともいう。

また熱は上昇して上半身に現れやすいので虚陽上浮、戴陽証などとも謂う。病理機序として以下の3証が考えられるが、諸証の鑑別は困難である。

1) 陰盛格陽

体内の陽熱は虚し、陰寒が非常に旺盛な場合、陰寒は陽氣との連携を拒絶するので、陽氣は逐い出されて体外に浮越して外熱裏寒の証を呈す。

2) 虚陽上浮

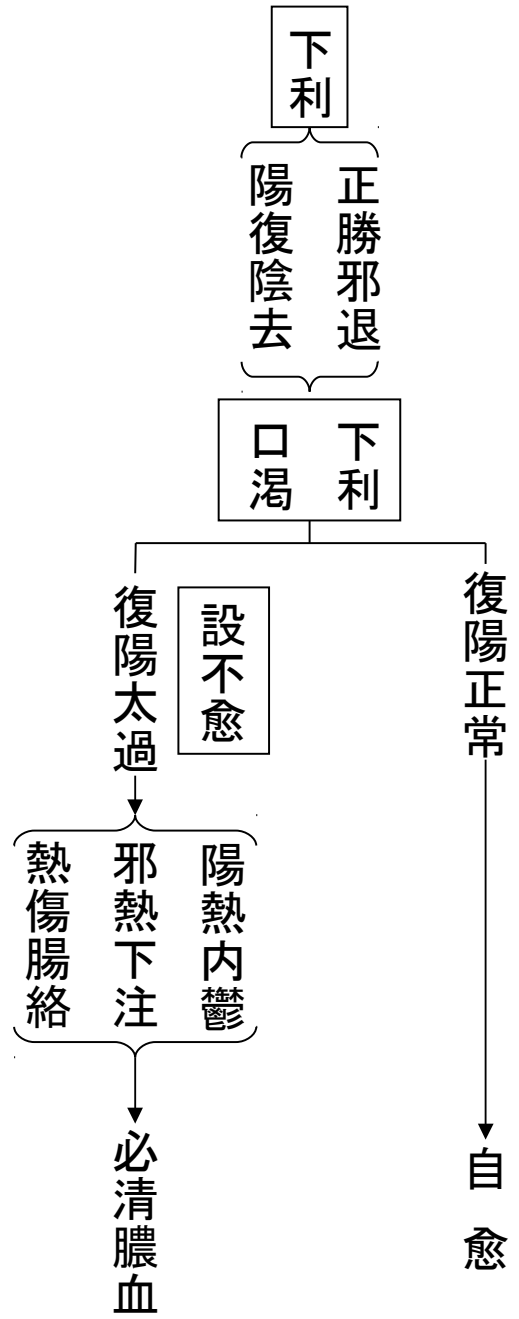
狭義の虚陽上浮は、陰陽が共に虚衰する結果、陰陽が互いに順接して協同することができず、陽氣は陰精の制約を失って独り浮上して仮熱証を現す。

3) 残存の陽氣が優勢な陰寒に反撥して発熱

陰寒に抑え込まれていた陽氣が、時に烈しく陰寒と相争い時に熱証を現す。

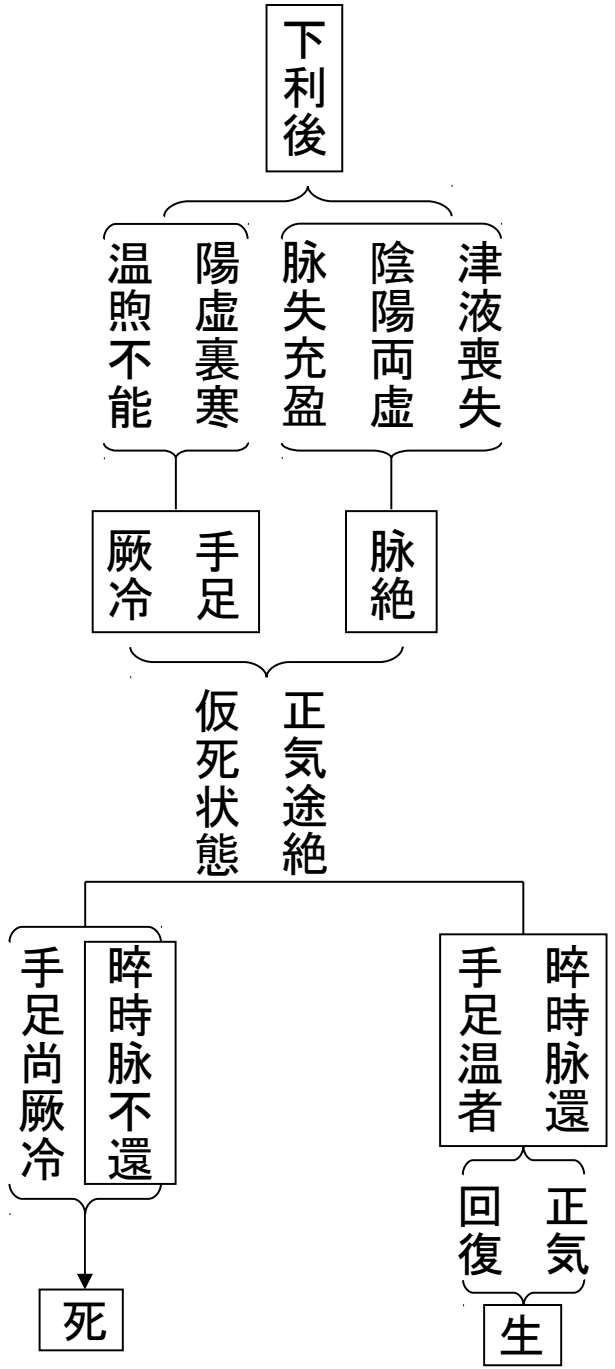
(厥陰下利の予後⑧)

第三六七条 下利脉数而渴者、今自愈。設不差、必清膿血、以有熱故也。



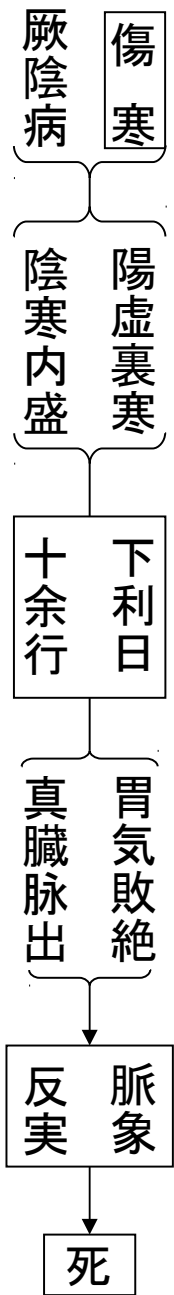
(厥陰下利の予後⑨)

第三六八条 下利後、脉絶、手足厥冷、晬時脉還、手足温者生。脉不還者死。



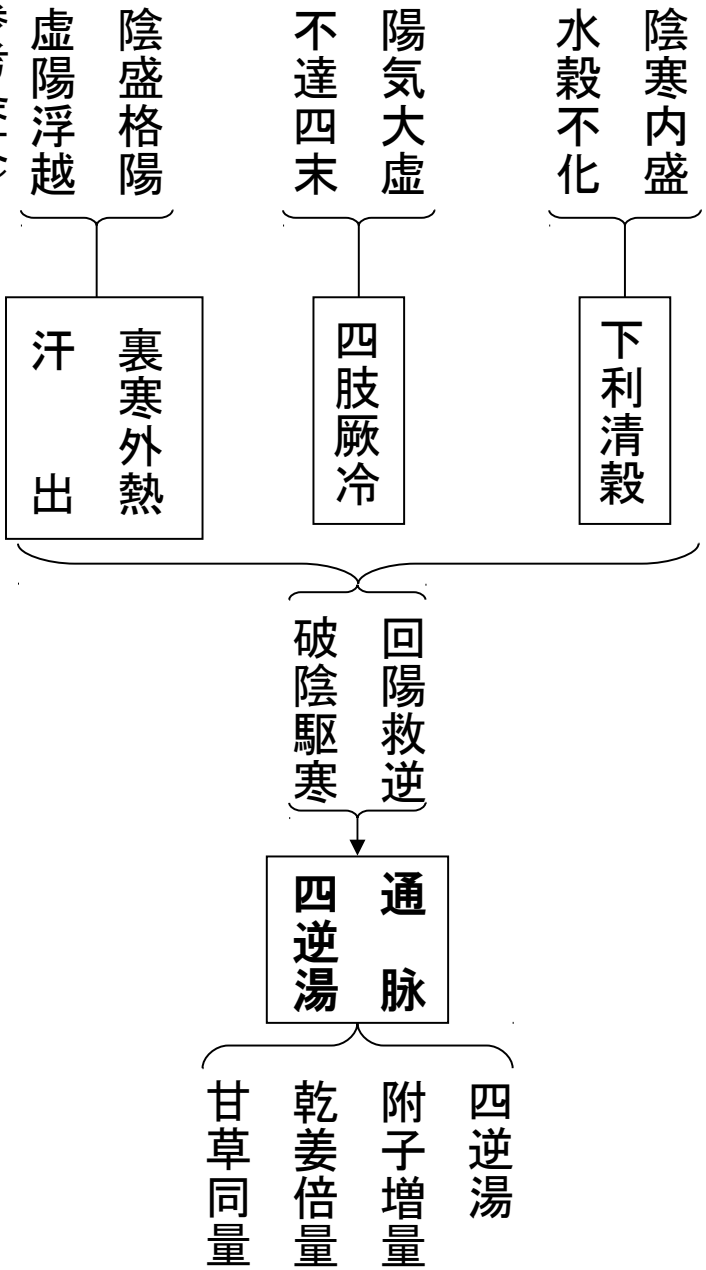
(厥陰下利の予後⑩)

第三六九条 傷寒下利日十余行、脉反実者、死。



(厥陰下利の予後⑪)

第三七〇条 下利清穀、裏寒外熱、汗出而厥者、通脉四逆湯主之。

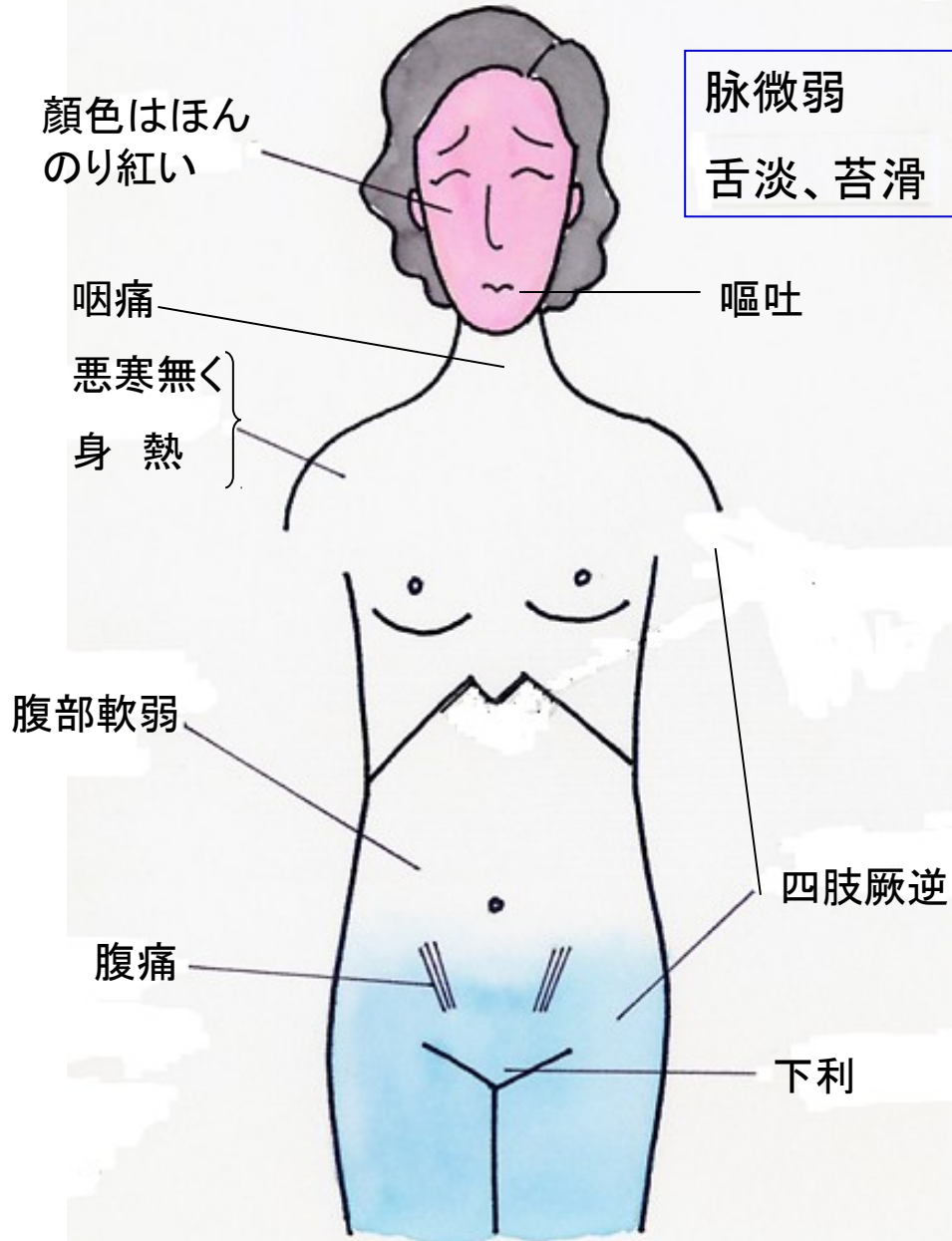


(参考条文)

第三一七条 少陰病、下利清穀、裏寒外熱、脉微欲絶、身反不惡寒、其人面

赤。或腹痛、或乾嘔、或咽痛、或利止脉不出者、通脉四逆湯主之。

厥陰病の陰盛格陽も 通脈四逆湯の証



方意

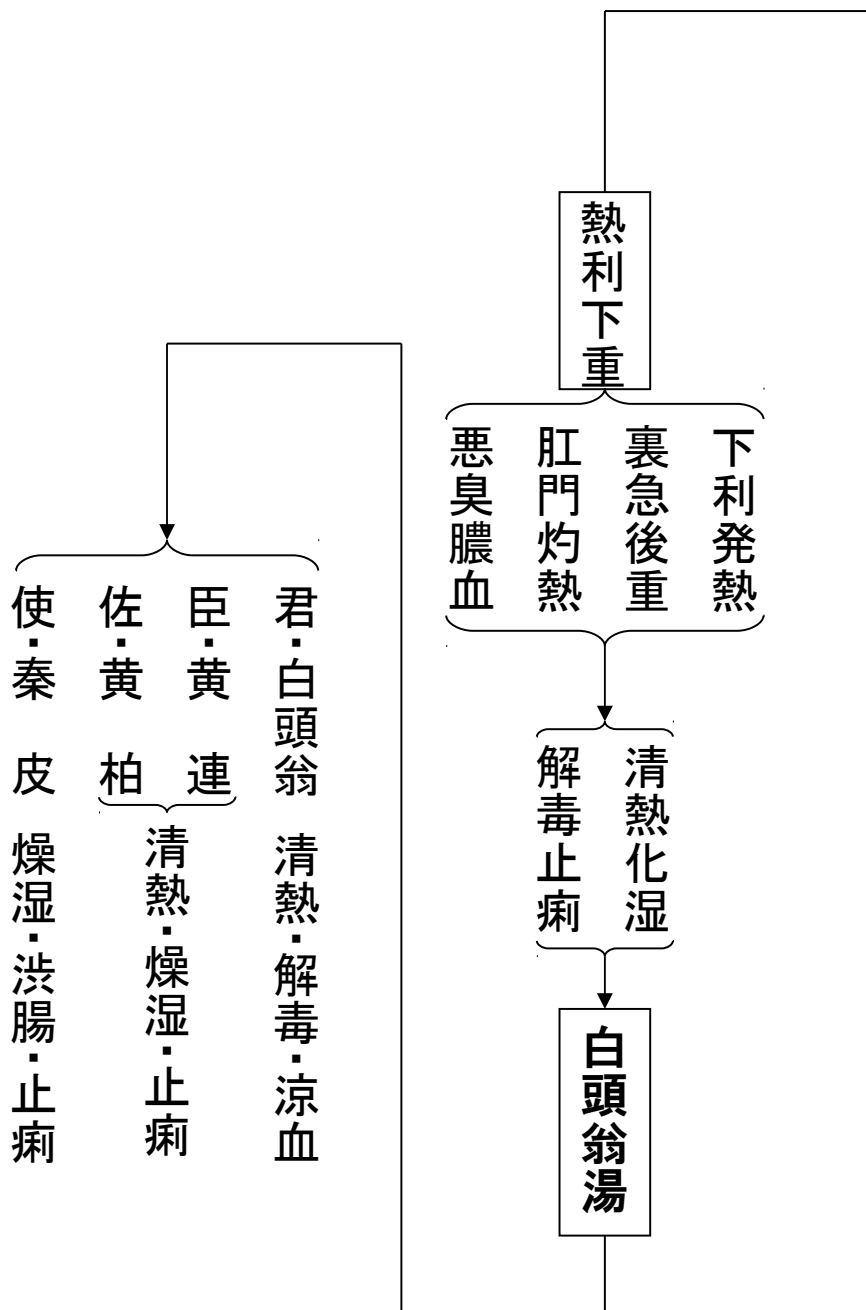
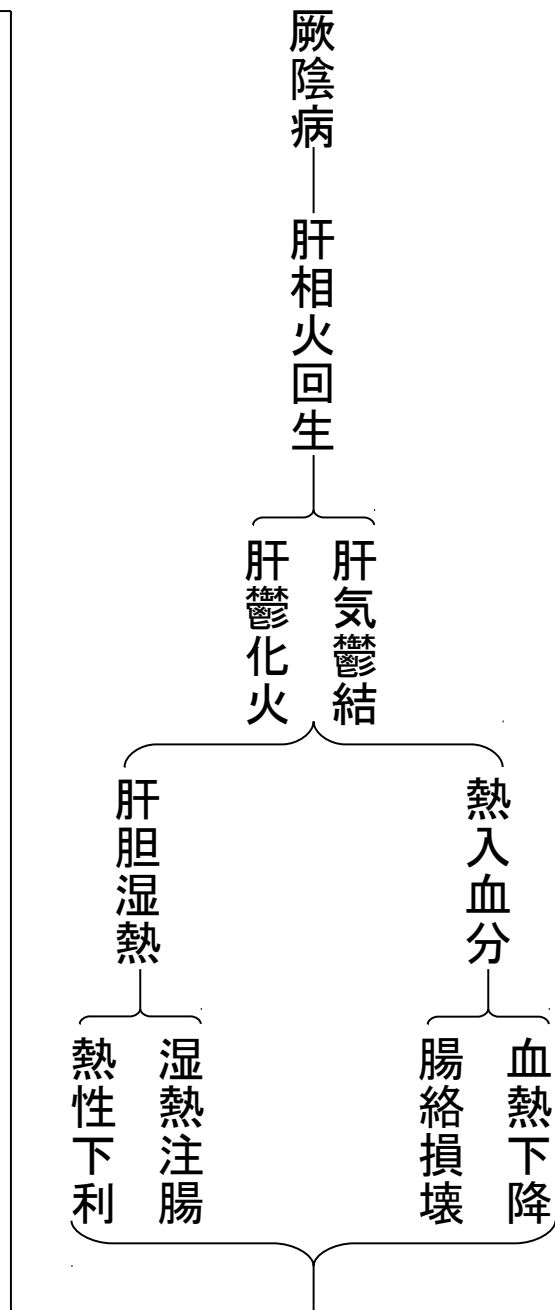
厥陰病で著しい陽虚裏寒が在り、旺盛な陰寒は弱い陽気を格絶して、これを体外に逐い出す結果、四肢厥逆や下利清穀などの裏寒証が在る一方、逐い出された虚陽が体表に浮越するので、体表部は悪寒せず反って発汗し、裏寒外熱の証を呈す。

弁証のTrias

- 1) 四肢厥逆、下利清穀
- 2) 外は悪寒無く、反て汗をかく
- 3) 脉微弱、舌色は淡で裏虚寒

(厥陰の熱利)

第三七一条 熱利下重者、白頭翁湯主之。



厥陰病の熱利は

白頭翁湯の証

舌質紅・黄苔
脉弦数

発熱

口渴

心煩

心下痞

腹痛

熱性下利

膿血便

裏急後重

肛門灼熱感

方意

厥陰病熱性下痢を治す主方である。厥陰病期、肝の相火が過剰となると、肝鬱火化して熱入血分すると共に、肝火は湿熱となって腸に下注するので、熱性下利と腸の血絡損傷に因る膿血便が合成して、膿血下痢・腹痛・裏急後重・発熱・口渴などが現れる。

弁証のキーワード

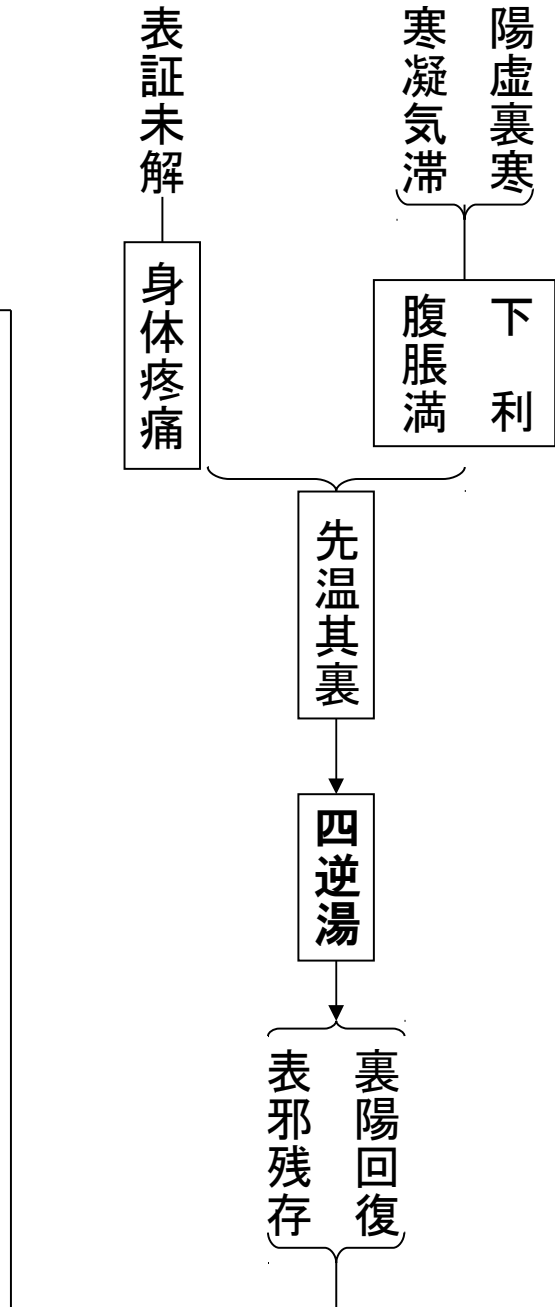
1)膿血性下痢便

2)裏急後重

3)発熱・口渴・腹痛

(表裏両感証・先急後緩)

第三七二条 下利腹脹満、身体疼痛者、先温其裏、乃攻其表。
温裏宜四逆湯、攻表宜桂枝湯。



参考条文

第九一条 傷寒、医之ヲ下シ、続イテ下利ヲ得テ清穀止マズ身疼痛スル者ハ急ギ当ニ裏ヲ救ウベシ。後ニ身疼痛シ清便自ラ調ウ者ハ急ギ当ニ表ヲ救ウベシ。裏ヲ救ウニハ四逆湯ガ宜シク、表ヲ救ニハ桂枝湯ガ宜シ。

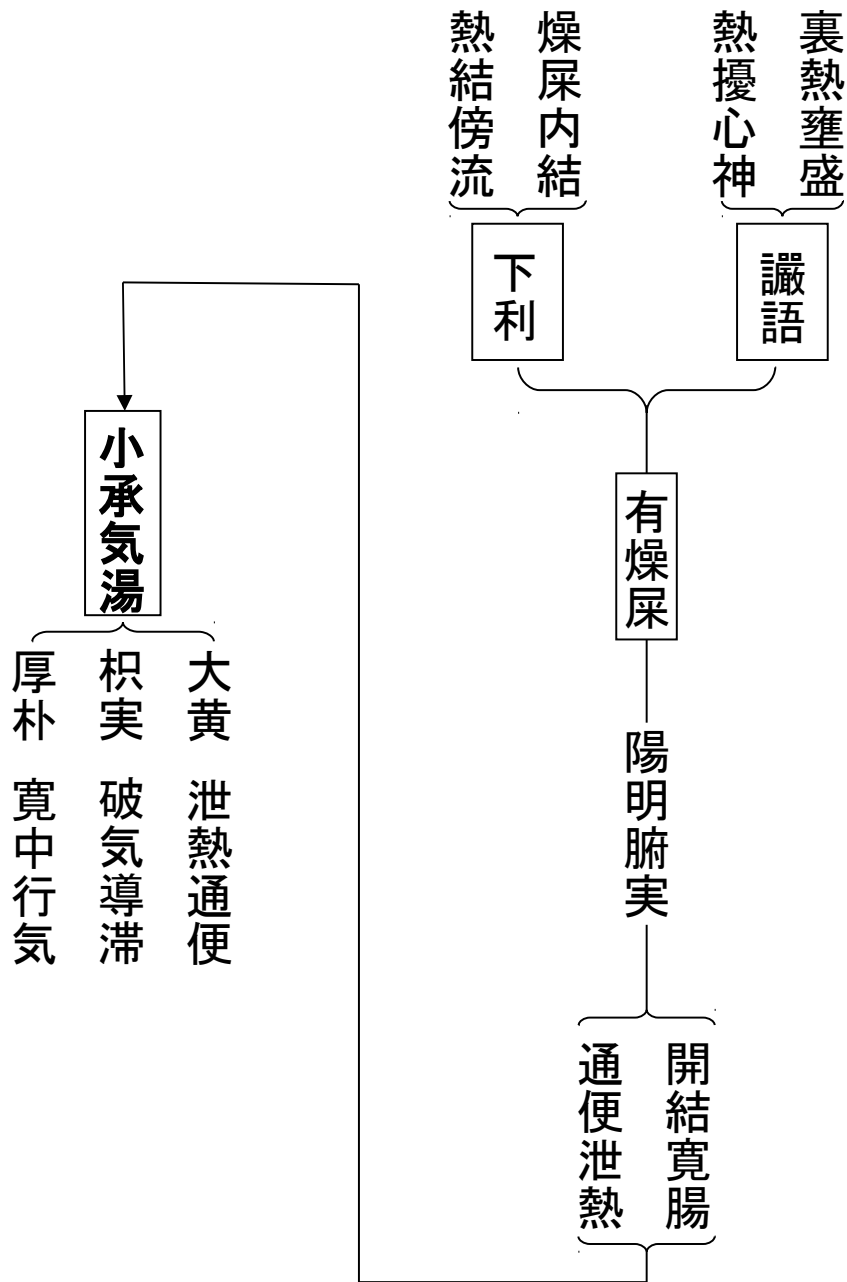
(熱利の鑑別①)

第三七三条 下利欲飲水者、以有熱故也、白頭翁湯主之。



(熱利の鑑別②)

第三七四条 下利讖語者、有燥屎也。宜小承氣湯。

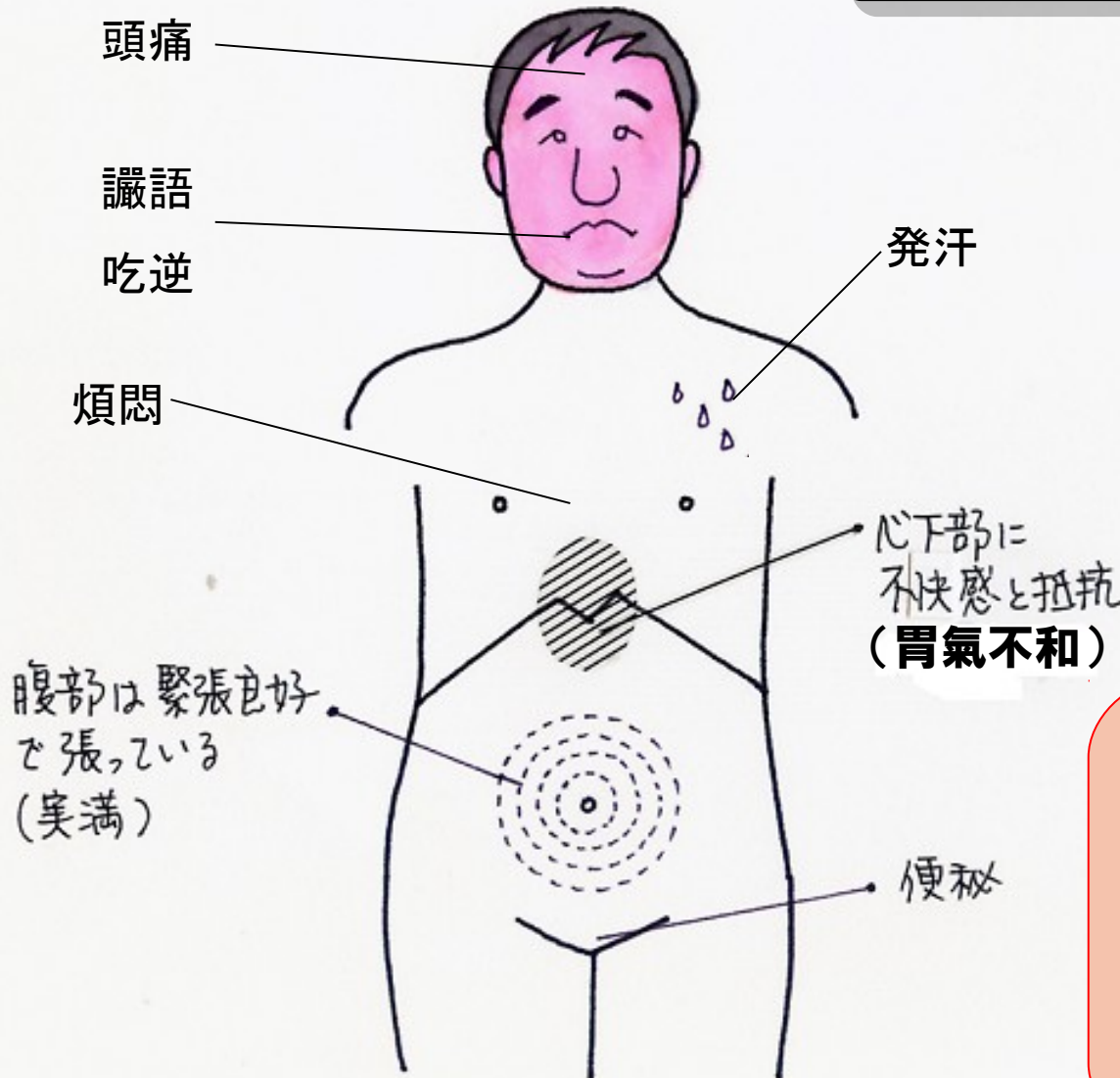


熱結傍流の熱利は

小承気湯の証

方意

大承気湯より芒硝を去ることにより瀉下泄熱の働きを若干緩和し、瀉下泄熱に胃氣を和す機能が加わる。三承気湯の中では陽明腑実の未だ軽度の例に用いる。



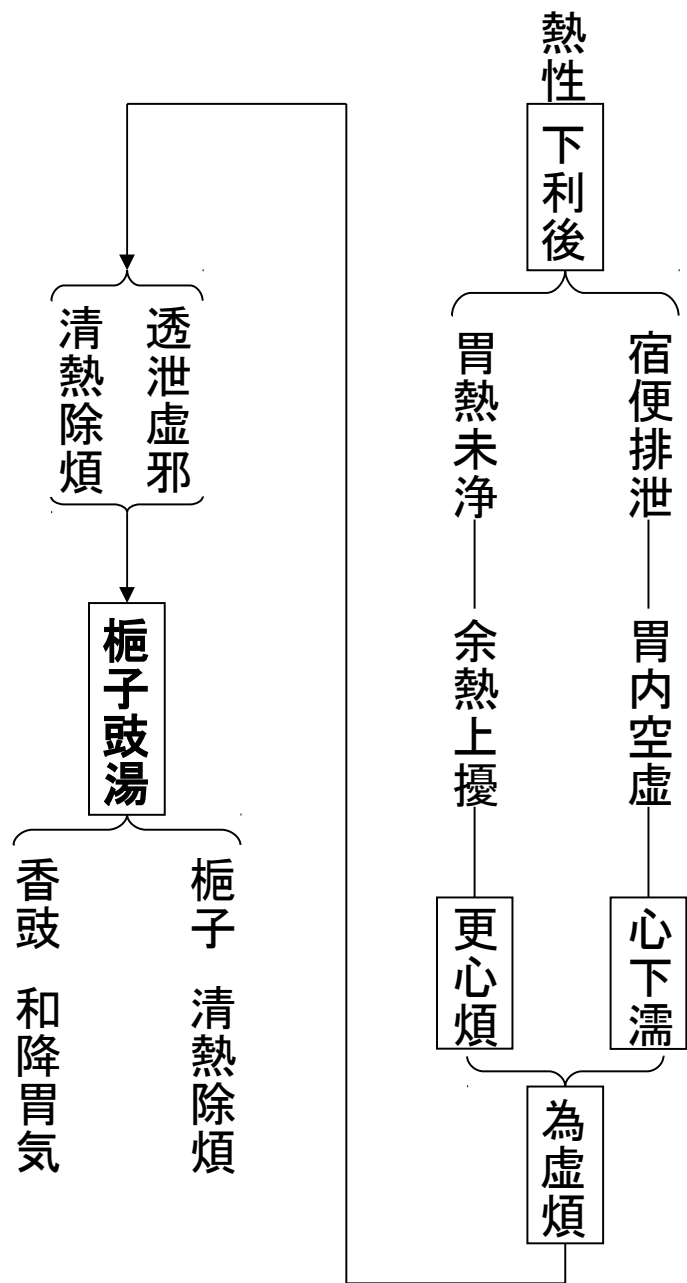
弁証のTrias

- 1) 腹部実満、便秘して痛む
- 2) 脉沈滑、舌苔黄または黒
- 3) 潮熱、煩躁、讞語

(熱利の鑑別③)

第三七五条 下利後更煩、按之心下濡者、爲虚煩也、宜梔子

豉湯。



下後虚煩するは

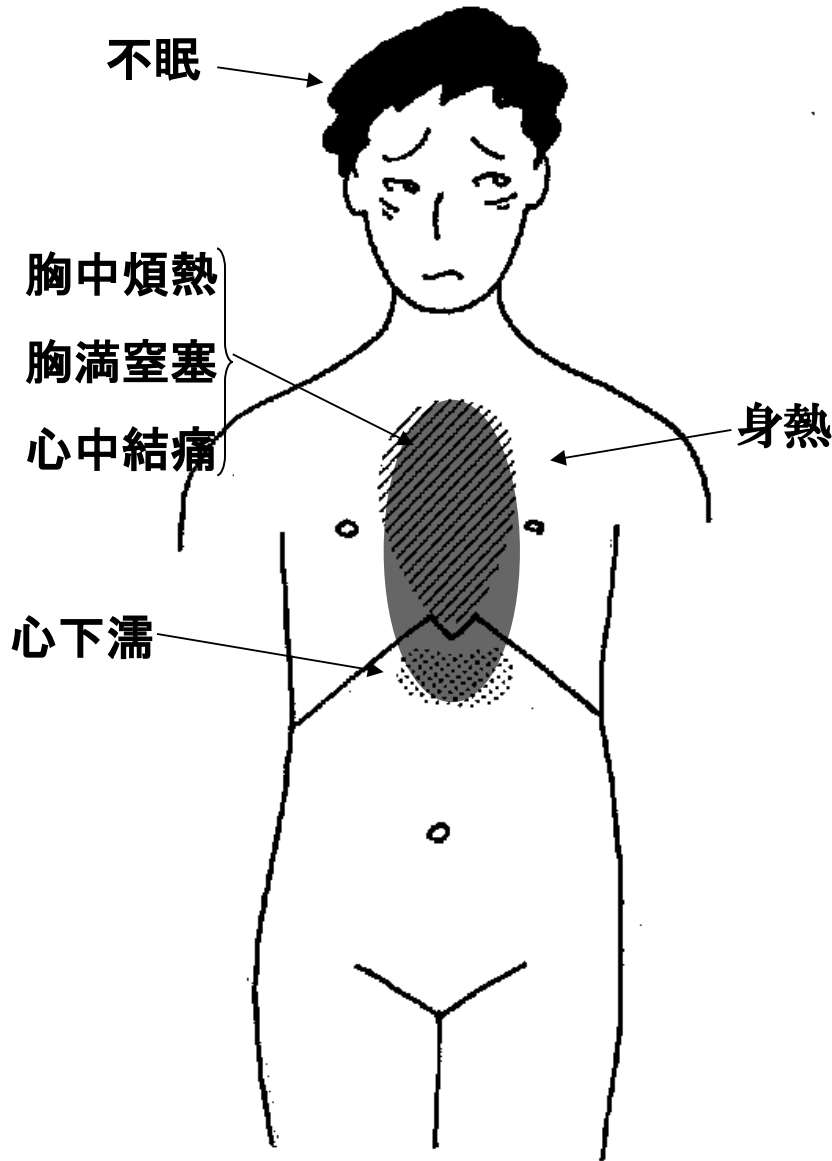
梔子 湯の証 *

方意

太陽病に発汗、吐、下を行った結果、傷寒の表証は残留して解されず、残余の邪熱が胸膈に内陷して虚煩証を生じたものである。虚煩証とは有形の実邪とは結合していない無形の熱邪が胸中に鬱していることに因って起る症状で、主な症状は身熱、胸中煩悶、焦燥感、不眠、胃部不快感、悪心などである。

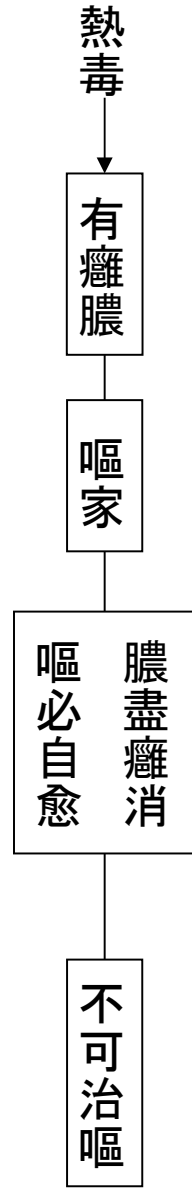
梔子鼓湯類(症状により処方を替える)

- 1) 梔子鼓湯(身熱、虚煩、不眠、心中懊恼)
- 2) 梔子甘草鼓湯(虚煩、不眠、少気)
- 3) 梔子生姜鼓湯(虚煩、不眠、嘔吐)
- 4) 梔子厚朴湯(心煩、腹滿、臥起不安)
- 5) 梔子乾姜湯(大下後身熱、微煩)



(嘔の証治① 癰膿)

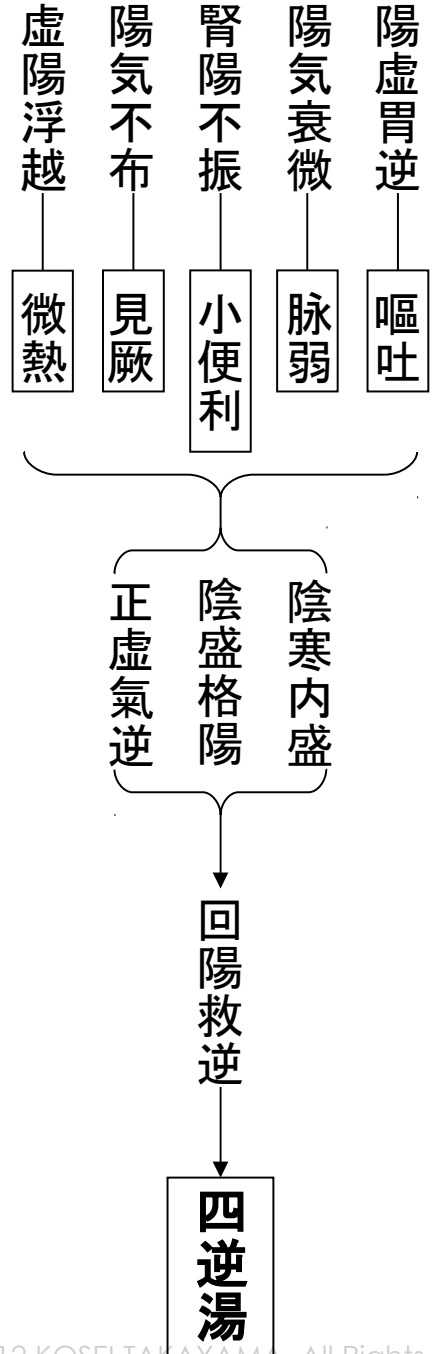
第三七六条 嘔家有癰膿者、不可治嘔、膿盡自愈。



(嘔の証治② 虚陽上浮)

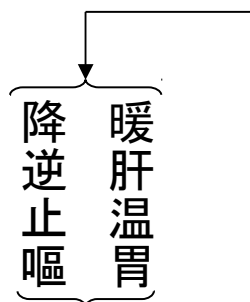
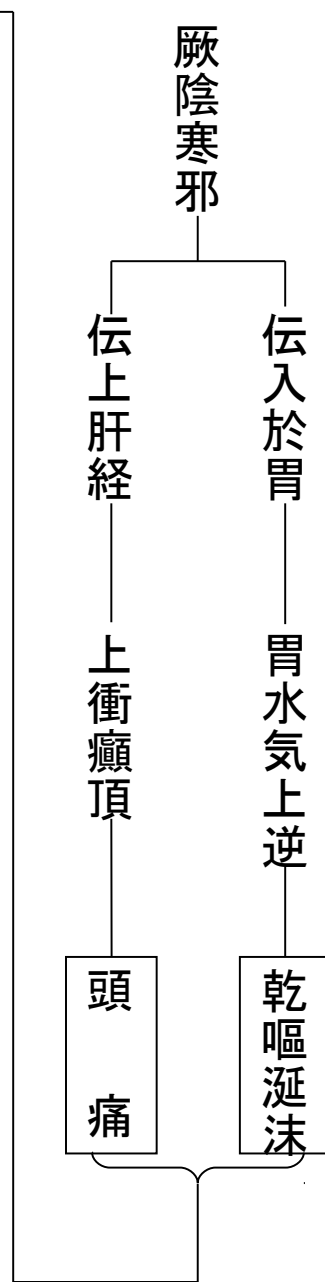
第三七七条 嘔而脉弱、小便復利、身有微熱、見厥者、難治、

四逆湯主之。



(嘔の証治③ 胃寒上逆)

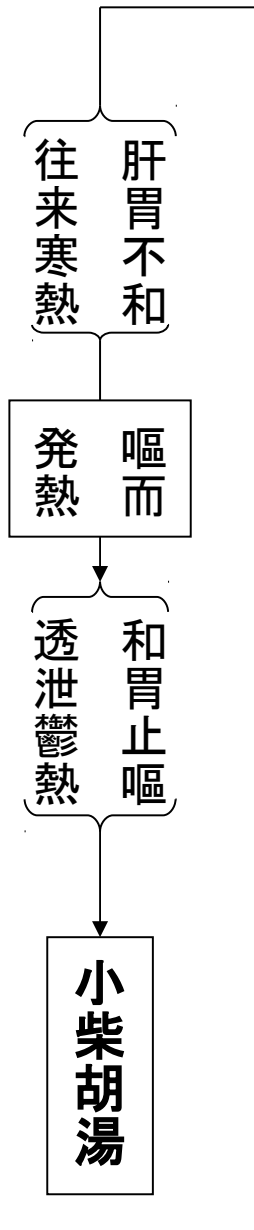
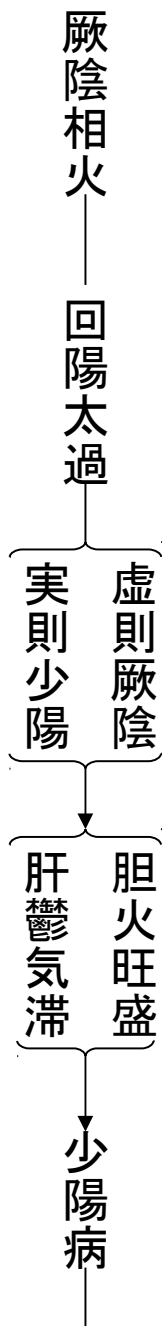
第三七八条 乾嘔吐涎沫、頭痛者、吳茱萸湯主之。



吳茱萸 — 暖肝温胃・降逆止嘔
 人 参 — 補虚益氣・温補脾胃
 姜・棗 — 温補脾胃・除痰止嘔

(嘔の証治④ 少陽発嘔)

第三七九条 嘔而発熱者、小柴胡湯主之。



裏の虚寒に因る嘔逆、厥冷、煩躁は

吳茱萸湯の証 *

方意

陽明病の胃寒証で食後悪心嘔吐を生じる者、

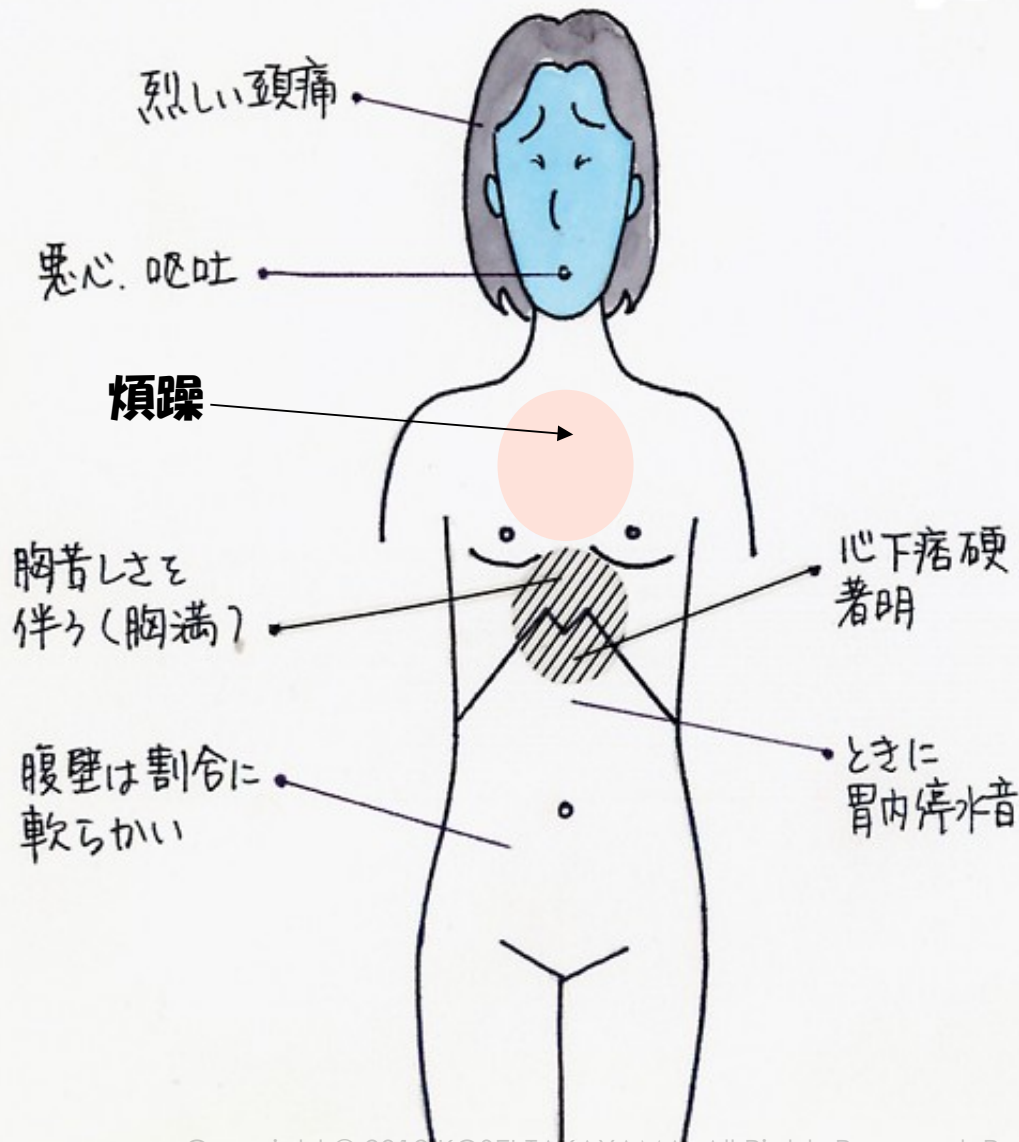
少陰病で吐利、手足逆冷、煩躁して死せんと欲す者、

厥陰病で乾嘔して涎沫を吐し、頭痛する者をいずれも主治する。

陽明病の嘔吐は胃が冷えて食を受け付けない結果である。

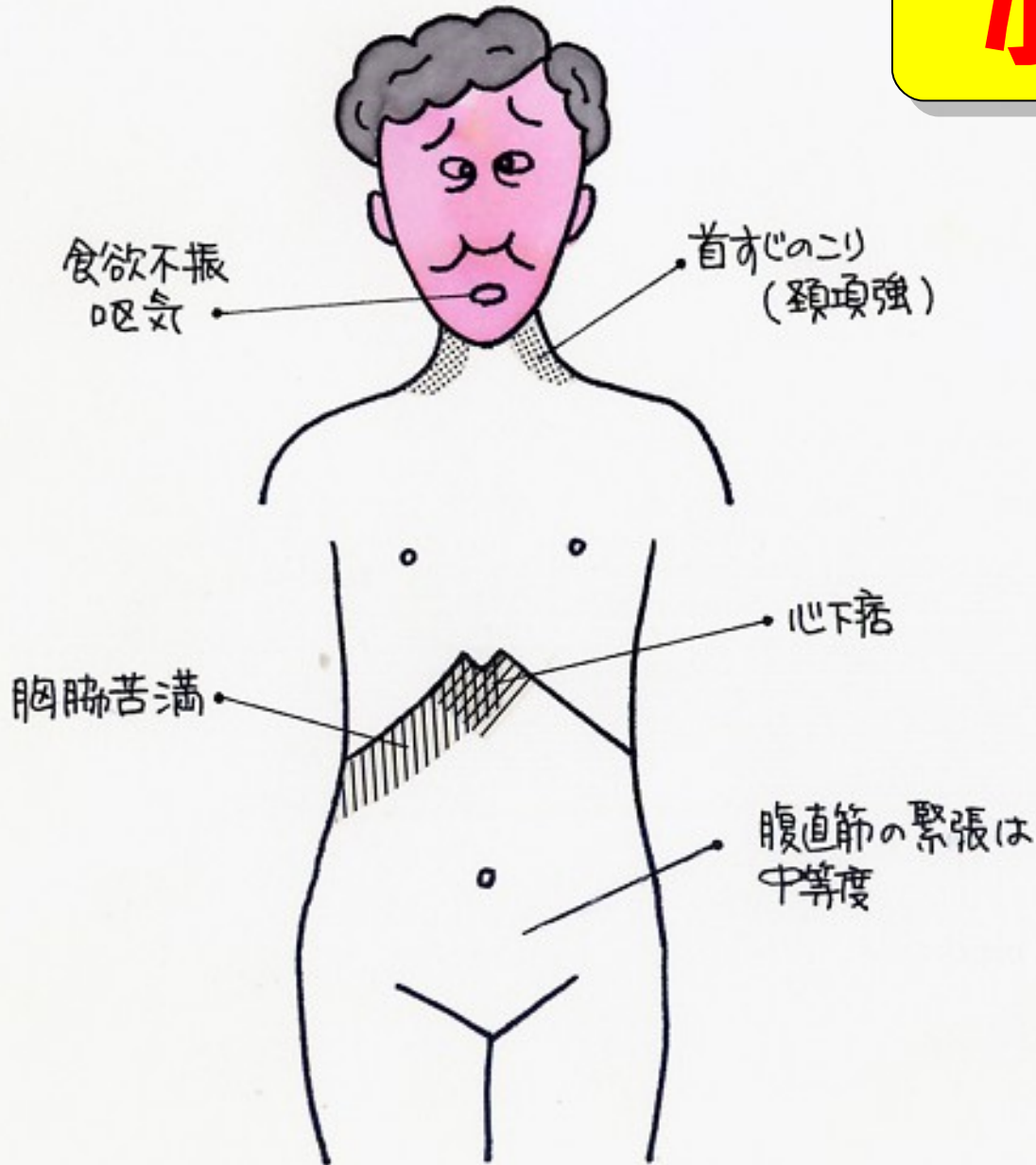
少陰病の吐利と手足厥逆は陰寒内盛に因る。煩躁は残存した僅かな陽気が裏で陰寒と相争うからである。

厥陰病の乾嘔、吐涎沫、頭痛は厥陰の寒気上逆に因るものである。



厥陰病の回陽過剰も

小柴胡湯の証*



方意

少陽病半表半裏の邪熱を透表し清熱して和解し、少陽の枢機を調整する主方である。

また少陽は厥陰と表裏を爲すので厥陰病で肝の相火の回復が過剰になると、病人は往来寒熱・嘔気・肝鬱気滞など少陽病の証を呈す。その時は本方で主治する。

主証

往来寒熱、胸脇苦満、食欲不振
心煩嘔気、口苦目眩。

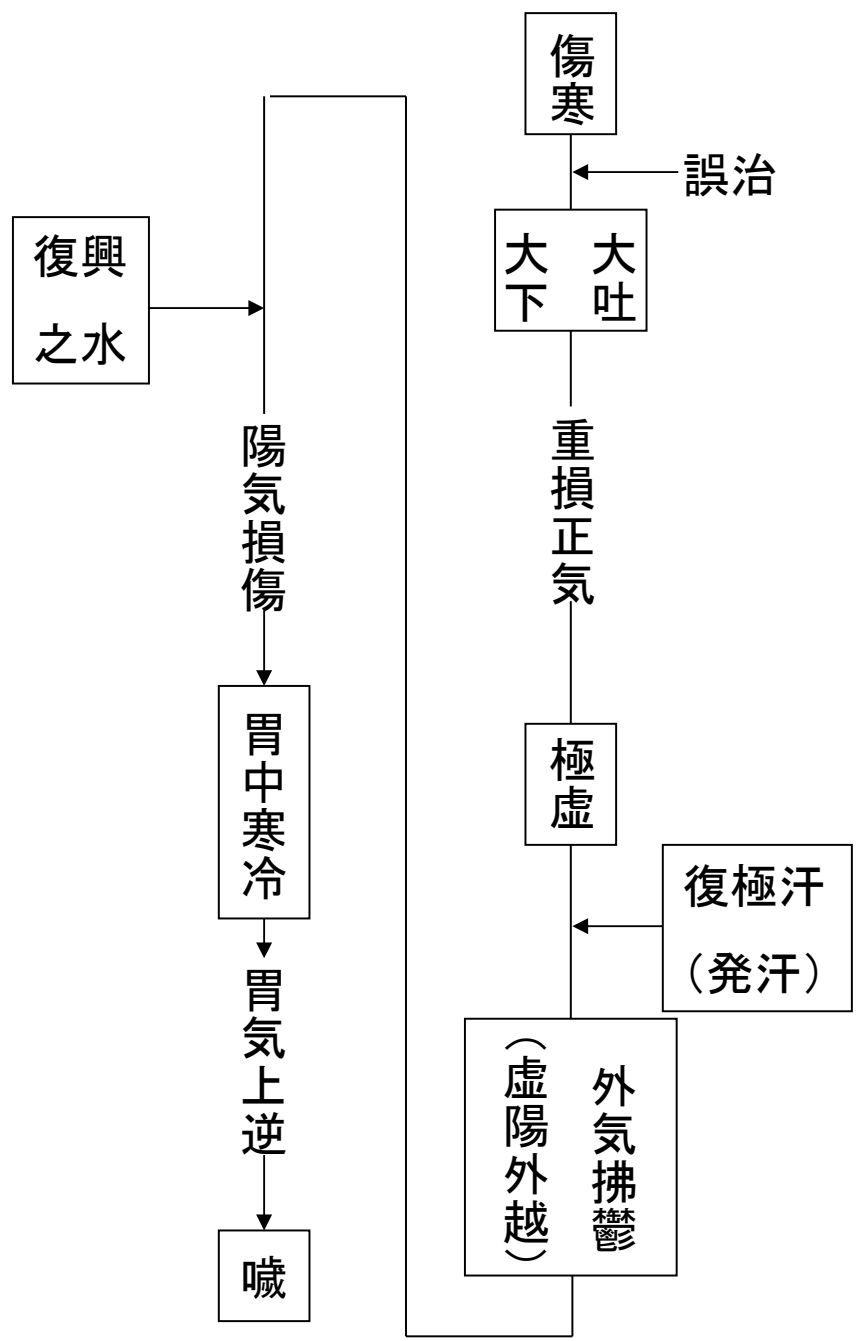
主証が一つでもあれば用いて良い。

小柴胡湯(傷寒・金匱)

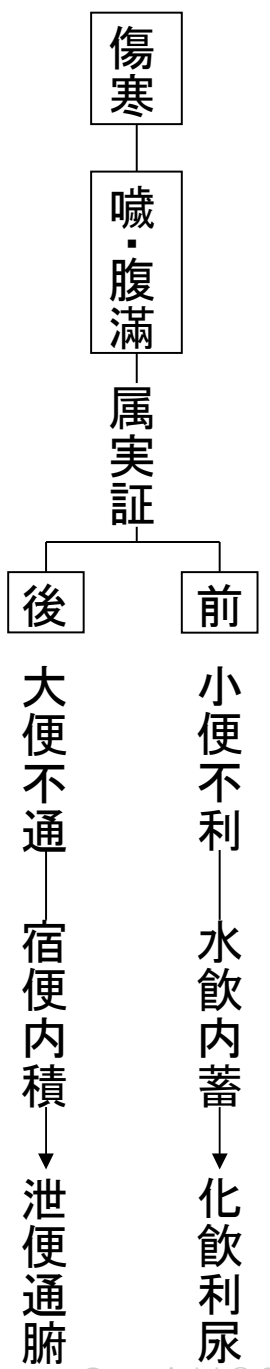
- 君薬 柴胡 7.0グラム: 苦微寒。少陽の半表の熱を清し、肝鬱気滞を治す。
- 臣薬 黄芩 3.0グラム: 苦寒。少陽の半裏の熱を清す。柴胡と協同して少陽病半表半裏の邪熱を散ずる。
- 佐薬 半夏 5.0グラム: 辛温、有毒。逆氣を降し少陽病に特有の嘔や咳を止める。生姜とは相畏る関係にある
- 人參 3.0グラム: 甘温。益氣生津。中焦を守り正氣を扶ける。
- 甘草 2.0グラム: 甘平。正氣を補い中を和す。諸薬を調和。
- 使薬 大棗 3.0グラム: 甘微温。補氣養血 } 姜棗は相須の関
生姜 1.0グラム: 辛温。半夏の毒を制す } 係で健脾輪胃する。

（噦の証治① 極虚の噦）

第三八〇条 傷寒、大吐、大下之、極虚、復極汗者、其人外氣拂鬱、復與之水以發其汗、因得噦。所以然者、胃中寒冷故也。



第三八一条 傷寒噦而腹滿、視其前後、知何部不利、利之即愈。



以上で太陽病より厥陰病に至る傷寒六経の病は終了した